
放課後、彼女にキスしよう～あなたを誰より愛してる！

優美香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後、彼女にキスしよう！あなたを誰より愛してる！

【Nコード】

N0260X

【作者名】

優美香

【あらすじ】

陸上が大好きな近藤が、ある日の放課後に同じクラスの女の子から声を掛けられる。その女の子は全身から必死さを漂わせながら、近藤に涙目で訴えているように見えた。「よ、よ、よよかったら一緒に行ってくれないかな」「え。別にいいけど」この会話が“運命”に変わって行く。近藤の初恋を主軸に、児童虐待や少年法にも触れています。かけがえのない存在の人へ——お互いがお互いを必要として行くこと、丁寧な心の声に耳を傾けること。単なる恋物語にするつもりはありません。極上の切なさとおもしろさをお届けします。

同じものを「ノクターンノベルズ」にも投稿しています。

「お気に入り登録」してくださった方！どうも有難うございます
！！！！！！

近藤 1

晴れた日の電車の中。長椅子に腰掛けている、髪の毛の長い女の子がいる。

高校の制服を着崩す事なく。

三つ折の真つ白な靴下を履き、膝を崩さないように。

車両の窓から暖かい春の陽射しが入って来る。

その女の子の頬を柔らかく照らし、膝の上に広げている英語の参考書の上で。

邪魔にならないように。何も言わず。

春の陽だまりは意志を持ち、時々、自分の方から身を隠しながら。

電車の中の皆にも平等な扱いをする。

時間を惜しむように唇を真っ直ぐにして、参考書を見てる、その女の子の隣。

学生服の男の子がいる。

その男の子も、膝の上に参考書を広げていた。

学生服の片手は、女の子の髪の毛を軽く人差し指に絡めている。

けど、視線は膝の上から動かない。

真剣な顔で頷きながら、時々、途中で少しだけ難しい顔になる。

「あのさ」

男の子が呼びかけるけど。

女の子は気が付かない。

「由佳、聞いてる？」

学生服に話しかけられた、由佳と呼ばれた女の子の長い睫毛が、ピツと揺れる。

「なに」

自分が聞こえていなかったにしていれば、有得ない程の態度が大きい無愛想さ。

で、由佳が学生服を見て。無愛想そのものの顔で応える。

「聞いてる」

邪険な返事の仕方は、ふたりを知らない人が見たら、多分、嘆くかもしれない。

だが、学生服の方は女の子の髪の毛から指を離して、真剣な顔つきで参考書を見ているだけ。

髪の毛から離れた人差し指を、参考書に当てる。

「ここ、なんでこんな数字が出てくんの」

言ったきり、ずっと由佳の言葉を待っている。

「ああ、これね」

由佳の言葉が、じっと待っている学生服に注がれる。

女の子らしい白くて形の良い指が、参考書の一点に触れる。

「ここ、この時の数字」

少し考え込んでいた学生服。

「あ、ほんとだ」

学生服の男の子の顔が、パツと明るくなった。

その男の子が、くしゃくしゃの笑顔で、由佳の頭を撫で回す。

「やつぱ、おまえ。すげえな。うん、すごい！賢い！偉い！！誉めてつかわすー！」

由佳は頬を赤らめながら、口調だけは強がってみる。

「馬鹿にしないでよ」

学生服が素に戻った顔をして返事をする。

「してないよ」

由佳が一瞬、言葉に詰まる隙を突いて。学生服が、真面目な顔で由佳の心と体に言う。

「大体、俺。由佳の事を馬鹿にした事なんか、一回もないじゃん」

頬を赤くしたまま、由佳が学生服に唇を尖らせて文句を言い始めた。

「だいたい直樹は、いつも難しい問題ばかり解いてるのに。なんで。

なんで、こんな簡単なのが分かんなくなるの？」

痛い所を突かれた学生服の直樹は思う。しょうがない。ここは笑って誤魔化そう。

「いや、それはだねえキミ」

そんな男の見栄や体裁を、由佳は簡単に打ち砕く。

生意気そのものの顔をして、当たり前のように無愛想に言い切る。

「やっぱいいい。聞きたくない」

直樹は意に介さない。

「なんじゃそれ」

一瞬後。

情けない顔をした由佳の

「やめてよう近藤くん。髪の毛、くしゃくしゃになっちゃおう」

の声と

直樹の、にやにやした顔で言う「許さん。直樹様と呼べ」の聲が重なって

電車の中には、ふたりが降りるつものの駅のアナウンスが流れている。

いつしか二人は、笑いながら電車を降りている。

季節は幾つか遡る……。

高校一年生の時。

夏休みに入る少し前、勇気を出して話しかけてみたのは由佳の方。

“ よっ、予備校の夏期講習に、行ってみたいんだけど。あ、あのあ、あ、秋葉原とか。よよ代々木とか、よく分かんないから。よ、良かったら。あ、い。

い、いい、一緒に行ってくれない…かな”

由佳が男子に話しかけるなんて、恐ろしい事に挑戦してみようと思ったのは

本当に、地理が分からなかったから。

（どうしよう、東京なんて。もう10年も歩いていない……。迷ったら困る……。誰にも聞けない……。）

由佳が、そう思っていた、おとこの放課後。

たまたま、耳に飛び込んで来た陸上部員達の会話に、反応する。

「きめえええええ！」

「マジきめえええええええええええ！」

「うつせー！俺は、メイドさんに話しかけて貰う為に、部活も勉強も頑張ってる……」

「俺はヲタじゃねええええええ」

どうなの……。

一番後ろの席に座ってる、あの人の声が聞こえる。

メイドさん???今の声、やっぱり……。あのんだよね……。
詳しいのかな？

詳しくそうだよ……。メイドさん、って確かあの近所だよな？

よくわかんないけど、聞いてみようかな……。

でも、男の子に挨拶以外はした事がないんだけど。
冷たくされなかったらいいな、変に思われなかったら良いんだけ
どな……。

どうしよう……。

どうしよう、どうすればいいんだろう……。

由佳は、そう思った。でも、どうしても行かなくちゃいけないよ
うな気がする。

挨拶も交わした事がないかもしれない、あの人に。
どうしても。話しかけてみなくちゃいけないような気がする。

確か、前にあった朝礼で校長先生に表彰されてた人。名字で呼ん
だらいいんだよね。

そこまで考えて、眩暈と激しい鼓動を感じる。

どきどきどき……。……。

どうしよう、近藤くんって呼びかけたらいいんだよね。だ、大丈夫。
うん……。

出来るだけ人がいない時に……。

近藤に話しかけるタイミング、ずっと狙っていた。

人が全然いない時って、ちょっと無理だなあ……。

せめて、今だったら大丈夫かな？

部活終了後。校庭の隅。

汗びつしよりの顔を洗い、そのまま水を飲む近藤に。斜め後ろから近寄る。

近寄りながら、骨っぽく広い肩幅と、短パンから伸びる太腿や筋肉がバランスよくついている背中。鍛えられ引き締まった腰の辺りに脅威も感じる。

だって女子には、そんなガチツとした美しさはないから。

……近寄ってくる異様な雰囲気。近藤は、恐る恐る振り返る。
（ヒッチコックの映画みたいな雰囲気がする！）そう思ってた。

そう。まさしく近藤はビビってた。

異様な雰囲気のは、由佳だった。

「何？村田さん何か用？俺、なんかの当番だったっけ」

外面では、ぽかんとしながら、タオルで顔を拭いている近藤に。異様な雰囲気を満たし、顔を引寄せ、必死で頼んでいる。

“ よつ、予備校の夏期講習に、行ってみたいんだけど。あ、あの。あ、あ、秋葉原とか。よよ代々木とか、よく分かんないから。よ、良かったら。あ、い。い、いい、一緒に行ってくれない…かな”

あ、都合が悪かったらいいの！

最初から遁走するつもり。体はその態勢を取っていた。

「え？ 別にいいけど」

なんだそんなことか。

え、あ。あの。ど、どうもありがとう！

「うん」

周りから「ヒューヒュー」と言う声が聞こえて来た、あの日。「委員長、勇気の告白！」とどつと囃し立てる声が沢山あった。あ

の日。

「ち、違う……」

言いながら、由佳の背中が逃げていく。

「へんなの」

近藤は呟く。

あの時の必死の形相って凄かった。怖かったよー。

村田さんでも、ああいう顔するんだね。

近藤の声が、右の耳から入って、速攻で左の耳から抜けて行く。

向かい合わせにいた由佳は、実はその時、固まっていた。

なんて返事したらいいんだろう……。

上手く笑えない。どうしよう。

道案内して、って言わなきゃ良かったかな…。

そう思っていたから。

日曜日のファーストフードの店の中。

近藤は、にこにこしながら、この話を繰り返す。

あの次の日、ちよつとした騒ぎになった。

誰が見ても、男子を避けている由佳が挨拶以外で、男子に自分から話しかけたのが。

クラスメートには意外だったのかもしれない。

近藤は、冷やかされる度「おまえ馬鹿だろ？」と言い、睨みをきかせて鎮静させた。
なんとなくだけど。

なんとなくだけど。いい加減に扱っちゃダメなんじゃないかなって。

それと、やっぱ、なんとなくだけど。大事にしないとだめだなって。

直観したから。

自分の向かい側に座って。

ほんの少し前の「ビビった」事を、嬉しそうに、楽しそうに。近藤は繰り返す。

由佳は、そんな風に、何回も何回も繰り返し話す

近藤の姿が羨ましいな……って、思う。

たまに見て知ってる。この人。

男の人だから、名前も覚えてるようで覚えてなかった。

部活の夕練中に見かける近藤は、いつも厳しい顔をしてるのに。今は、すごくにこにこしてる。別人みたい。

トラックを走っている時の、この人。すごく眩しいんだろうな……。

やや切れ長の瞳、陽に焼けた顔。のんびりマイペースな、この人。後ろの方から聞こえてきた朗らかな声が「メイドさん」と言わなかったら

多分、話しかける事もなかったんだな。

自分に笑いかけてる、この人を見ていたら不思議な気持ちになってくる。

勉強なんか どうでも良くなってくる。

屈託ない人だなあ。

あ、こっち見てる……。

「あ、でもね。部活の連中がね」

「う、うん」

「委員長って度胸あるな、って。あんな大勢の前で誘うなんて凄いなって。フフッ」

「委員長？」

「村田さんのあだ名。ちょっとでもチャライ男には、絶対に口利いたりしないし。」

それに服装検査でもアレだし」

「……そんなに硬いのかな」

「あ、ごめんね」

近藤は、申し訳なさそうに黙ってしまう。

「ううん、大丈夫。こっちこそ、ごめんね」

男の子って、こんな風に笑ったりするんだな……。

近藤 2

眩しい人だなあ……。この人って。

由佳は思う。

自分みたいな人として、つまんなくないかな。

いい家庭なんだろうな、きっと。近藤くんの家って。
羨ましいな。

今日みたいな晴れた休日 家で過ごすのは苦手。
自分で自分の居場所を探す。

大嫌い、と由佳は思う。……あんな家庭、要らない。と。

父は酒癖が悪く、理解の範疇を超えて家族に力を振るう。
母や自分。弱い者には見境がない。もう慣れた。慣れたくないけど。

由佳は、自分の束ねてる髪の毛を見る。

セミロング。ゴムで束ねてるのは、引っ張られにくいから。

同級生の中には、化粧をしている子もいる。

自分以外の同級生は、高校入学してから、どんどん綺麗になって行く。

凄いなあ……。と思う。

私には無理だな……。いつもそう思う。

「彼氏が出来た」と嬉しそうな子も、ちらほら。
何をしたら、異性と付き合えるんだろう？

男子なんて大人になったら、きっと。自分以外の誰かを脅かすだけなのに。

地味な黒いゴム。変わり映えしない。でもこれが一番いい。家の中で、日常を変えてみようとは思わない。

例え、たかが色付きの髪ゴムであつたとしても。もう諦めた。愛されたいと思う事も。分かりたいと思う事も。何もかも。淡々と時間。

それが一番楽なもの。

親とは口は利かない。特に機嫌の悪そうな時には。いつのまにか、自分以外の人の顔色ばかり伺っている、そんな気がする。

家に帰りたくない。一日のうち、一番怖い時間は、家族が近くにいる時。

とにかく避けたいと思う、その態度が気に入くわない、と殴られる。男に生まれていたら良かった。もしも、次に人間に生まれて来れるなら男がいいな。

……近藤の話が、耳に入って来ない。

眼の前の近藤みたいに、明るいい人になれたらいいな。

そんな風に思つて、適当に相槌を打っている。

唯一の救いはずの、母も頼りにできなかつた。父に殴られている時、由佳の事を護ってくれる事は、一度もなかった。

今でも覚えているのは「いい気味」の言葉。

……どうして私、近藤くんに声掛けちゃったんだろう？
勢いだけで、後先とか、そういうの。全然考えてなかったような気がする。

少しずつ、少しずつ、畏れてゆくような胸騒ぎがする。

……私の目の前にいる、この人の事を。どうしてだろう。たかが同級生なのに。

でも、ここにいるのは、私の知らない世界の人。目の前に立ちただかる異世界の人。
額に汗が滲む。

こわばってくる自分の表情を、近藤がサッと眼の端で捉えた。
それに気が付いたから、何とか空気を変える。近藤くんは悪くない。

眼をぱちぱちさせながら、問いかける。

「あ、あのう」

「なに」

「近藤くんって、兄弟いるの」

「いるよ。妹2人と弟1人」

「へー。喧嘩とか、する？」

「するよ。でも、ちっちゃいから。ちよつと怒鳴って強権発動する
と」

「すぐ言う事聞くよ」

「……殴ったり、する？」

「しない」

即答された。きっぱり。

「なんで」

「小さいだろ。弱いし。自分より年下のは殴っちゃだめ。大事にしないと」

「……」

「俺、部活やってて良かったよ。先輩は先輩。ちゃんとね、立てるの。」

んで、後輩は大事に厳しくするんだ

そしたら、ちゃんとするんだ。自分も」

言葉を失って、近藤を見つめていた由佳の大きな眼から涙がボロボロこぼれ始める。

「どうしたの？」

びっくりした近藤は、周りを見回し、由佳の方まで来て俯いてボロボロ泣いてばかりの、肩を叩く。

「出よう」

近藤 3

由佳の鞆と自分の鞆を肩に掛けて、テーブルの上のドリンクをそのままにして。

「村田さん、大丈夫……？」と。

誰にも由佳の泣き顔を見せないように庇いながら。近藤は急いで外に出る。片付けは誰かがやってくれるだろう。

日曜日のここら辺は、人が溢れかえってる。その中を歩く。とにかくどこかで落ち着かせないと。

下を向いて声を殺したまま、泣いている由佳が、よろけないように、肩を抱いて歩く。

一番下の妹が生まれたばかりの頃。近藤は小学校6年生だった。よく泣く赤ん坊だった妹を、抱いてあやしながら、泣き止んで寝付くのを、待っていた頃を思い出す。

なかなか泣き止まなくて、てくてく夜の住宅街を歩いた。今している事も、変わらないような気がしてくる。

路上では、誰も自分達の事は見てない。

ひつく、ひつく……、肩を震わせている由佳の足元に、時々、涙が落ちて行く。

雑踏を10分ほど歩いたら、人ごみを抜けて公園に入った。ベンチないかな……。ちょうど長椅子が、一個。空いてる。

座ろっか。

「村田さん、ちょっと休もうか」

声を掛けて、座らせる。これで一つ片付いた。次は……っと。

少し離れた所で、即席ミュージシャン達が、上手にバラードを歌ってる。

違う角度に眼をやると、踊ってる集団が3つ程あった。

夏の風が心地良い。今日はあんまり暑くなくて良かったな、と思う。

急に気が付いた。

由佳の肩から腕を離す。

「ごめん」

由佳の返事はない。

「馴れ馴れしくてごめん」

「だ、だいじょう……」

そんなに泣くような事、言っちゃったか？ようやく近藤が素に戻る。

まあいいか。これも日曜日の過ごし方の一つだ……。

バラードが2曲終わって、ようやく泣き止みそうな声で、由佳が

「ごめんね、近藤くん」

そう言った。ごめん、と繰り返す由佳に、いいよ、と言ってやる。

「鼻水、かむ？」

「うん」

「ごそごそと、由佳が鞆の中からポケットティッシュを取り出して、ぐしぐし、顔を拭いている。うーん、こういうところも下の弟妹みただ。」

黙ったまま、由佳が顔を上げるのを待っている。

近藤は気が付く。

俯いた由佳の額の、前髪を上げた生え際のところに青い痣があること。

「村田さん、これ……」

思わず触れてしまう。この跡は。

あ、と由佳が声を出す。

「殴られた」

「だ、だれ」

近藤の声が震えてくる。

「親」

聞きたくなかった。

それでも尋ねてる自分を、近藤は何故か止められない。

「いつ」

言葉を発した直後、近藤は悟る。何故、急に由佳が泣き出したのかも。ぜんぶ。

「おととい」

夜？ 頭って、下手したら。

うん。由佳が声を出さずに、首だけで答える。

掌を握り締める。汗が出て震えてくる。もう駄目。心臓が痛い。

「はじめて？」

「違う」

うつ、由佳がまた泣く。

その由佳の姿を見て、近藤も、我慢しきれずに泣き出した。

「マジかよ村田さん可哀想じゃんかよ」

「俺んちの妹だったら良かったのに……」

「絶対、女の子は殴っちゃいけないのに……」

それを聞いて由佳が、ますます泣きじゃくる。

「近藤くん、ごめんね」

「心配させちゃってごめんね」と言いながら。

二人が眼を真っ赤にして、ようやく落ち着いて来たのは、辺りも黄昏れて、なんとなく寒くなってきたから。

人の数も少なくなった。

陽が落ちると、ますます寒いだろう。近藤はそう思う。早く帰らないとな。

ミュージシャン達も、いなくなっていた。

「今日は、もう帰ろう。来週、また来よう」

近藤が話しかける。由佳が「うん」と言っで、立ち上がる。

「ありがとう近藤くん。私ね、近藤くんと、今日、来て良かった本当に、ありがとう」

スカートの埃を払いながら、由佳は照れ臭いけど言う。

——だって、それまで話したことなかった人。こんなに私にしてくれる。

「俺も」

「来週、予備校あったっけ？」

近藤 4

「なにオマエラ 初デートに制服で行った訳？」

「だっせー！」

「激しくダサイ！」

「んで何なん。そんなに眼を腫らしちゃって」

「その場で速攻フラれたんじゃないの」

「うるせえなてめーら」

翌日。まだ少し眼が腫れている近藤が同級生を睨みつける。

「しょうがねえじゃん、だつてさ。」

委員長つたら「学生として行くんだから制服よっ！」とか、言うんだもん」

「今から尻に引かれて、どうすんだ？」

「てめえらぶつ殺すぞコラ」

朝練が終わって近藤達が、教室で着替えている最中に

朝早い日直の仕事がある由佳が、引き戸越しにその会話を聞いている。

あれってデートになるのかな？と思う。知らないうちに頬が赤くなる。

……早く入りたいな、どうしよう。

いくら「日直」という大義名分があっても、着替え中の男子の中心引き戸を開けて入る勇気がない。どうしても。

立ち止まっていると、一人の男子が「なにしてんの」と言いながら引き戸を開けてくれた。

「嫁が入れなくて困ってんぞ」

2時間目の途中から、近藤は一番後ろの席からなんとなく気になって、一番前の席の由佳を見ていた。

「日直か」

3時間目が終わってから黒板の字を消している由佳に、後ろから話しかけてみた。

村田さん、村田さんってば。

一心不乱に黒板を綺麗にしていた由佳が、二回目ようやく気が付く。

「今日、日直なんだね」

「うん」

「5時間目、美術だろ」

「うん」

「荷物多いから、手伝うよ」

由佳の動きが一瞬止まる。

「えっ」

「階段、危ないし」

「あ、ありがとう」

「怪我したら大変だろうから」

それだけ、由佳の背中に話しかけて
近藤が居なくなる。

「う、うん」

由佳の全身が赤くなる。指の先まで。どうか誰も見ていませんよ
うに。

昼休み、由佳が立ち上がった時に、近藤も立ち上がって
廊下に出ていた。

「村田さん、声かけてくれたっていいじゃん」

人懐こい笑顔で、由佳の眼を見て笑う。

「あ……。ごめん」

「いいよ」

行こう、隣の校舎だから時間かかるし。そう言って近藤が歩き出
す。

美術準備室は、一年生の校舎からは遠い。

準備室のある三階まで、階段を昇り降りしないとならないので
教材を持って歩く女子が、階段で滑って転ぶ事も、たまにあった。
階段の踊り場に「足元注意」と、書いてある貼り紙が有る。

二人は、黙ったまま歩いていた。準備室の引き戸を開け、また閉
める。

由佳にプリントの束を持たせ、近藤は大量にある模造紙の束を抱

えた。

由佳の眼が泳ぐ。

あ……。ありがとう、って言いたいの……。……。

近藤が、さっさと動いてしまっから、言えなくなっちゃった。

階段を下りて行く、その途中。急に近藤が、隣の由佳の方を向いて言った。

「あのさ」

「なに」

「今日、俺んち来いよ」

「え」

「つつか、来て。勉強しようよ」

「は？」

「一緒に勉強してください。俺、進学したいのよ。親父の跡を継ぎたいから。」

でも数学が苦手だし、教えて」

「いいよ」

「なんかさ」

「なに」

「昨日と全然違うね？」

階段の踊り場で、ピタッと由佳の足が止まる。

「だって……」

「？」

「ここ。学校だもん……」

困ったような由佳の声に、近藤が屈託なく笑った。

「悪いけど、部活終わるまで待ってて」

「うん」

「よかった」

部活が終わるまで、由佳は校門の近くで近藤を待っている。

近藤が来た。

「ごめん遅くなった」

「うん」

ふたりとも黙って歩く。

「こっち、ずっと歩くと俺の家なんだ」

「そう」

近藤が、自分と歩調を合わせて歩いてくれているのが、由佳には分かる。

（申し訳ないな…）

横を見ると、近藤本人は、時々口笛を吹いている。

突然、話しかけられる。

「あのさ」
「なに」

近藤は、にこにこしながらこっちを見ている。額に汗が浮かんで来た。

「何か部活、やってた？」
「え……っと」
「なに？」

由佳の顔が赤くなる。

「き、きしょう」
「え？」
「天気図、書くの」
「ええー、凄いな！渋いわ、それー」

近藤が笑い出す。由佳の顔がますます赤くなる。
「ひ、ひどい」
必死で言ってみた。

「ごめんごめん」
屈託のない笑顔に、吸い込まれそうになる。

「どんな事するの？」
「ラジオを聴いて、天気図に書き取って行くの。どこそこ、何ミリ
バール、とか」
「それで？」
「何となくだけど、季節によってね。空に吹く風の向きとか、陽の
光とか分かるから、それが楽しくて」

「へー」

近藤は、しみじみ言った。

「俺はさ、走ってる時の背中に当たる風しか分からないけど。

大陸や海を渡る風の色が見えるって言うの？そういうのもいいねえ……」

この人、本気で、そんな風に言ってくれてるのかな。

「でもね、すつごく地味だよ？」

「何が」

「短波の男の人の声と、字を書いてる音と、紙をめくる音しか聞こえない」

「へー」

相槌を打ちながら、近藤は由佳の鞆を見ていた。

普通の女の子なら、いっぱいマスコットを付けてるのだろうけどこの人の鞆は、味も素っ気もない、単なる学生鞆だ。

ふっと思った。

「あのさ」

「なに」

「誕生日、いつ？」

「え？」

「村田さんの誕生日」

由佳の頬が、また赤くなる。

「な、なんで？」

赤くなつた頬のまま、近藤を凝視する。

近藤は、一瞬、立ち止まって、そんな由佳の髪の毛をくしゅくしゅにしてやりたくなる。

「聞いちゃだめなの　誕生日くらい」

「そうじゃないけど……。近藤くんは？」

「俺？」

「うん」

「7月30日」

「私は7月4日」

「あ！終わっちゃってるじゃん……」

「うん」

終わってたらしょうがないなあ……。近藤は首を振る。

「ごめんね」

「いや、そうじゃない。あ、今度また、一緒に出掛けようよ」

「え、いいの？」

由佳の眼が丸くなる。

「ぷっ。そんな。まるで黒船が来た時の日本人みたいに」

「やだあ」

由佳が笑い出す。

「近藤くんは夏休み中だね、誕生日」

「うん、今年も大会にぶつかっちゃって」

「そうなんだ」

「夏休みさ、もうすぐじゃん。どっか行こうよ。今度は私服で」
「うん」

はつきり次の約束を取り付ける前に、近藤の家に着いてしまった。

近藤の家に入ると、広いリビングには
二つのドラフターとパソコンが2台あった。

「これ何？初めて見た」

「ドラフター」

「ドラフター、ね」

由佳が復唱する。

「そう、ドラフターって名前。図面を引くんだよ。大きいよね、これ」

近藤が言って、白い斜めの盤の上をコツコツ叩く。誇らしげな表情になった。

「これ、今、ホントは使わない。

全部パソコンで出来るから。

でも親父は「初心を忘れちゃいけないから」って

「ふーん」

勉強しよ、ちょっと待ってて。

そう言って、近藤は部屋の壁に有った折り畳み式のテーブルを
てきぱき器用に広げ、台所から椅子を二つ持ってくる。

「ありがと」礼を言って、向かい合わせに座る。

二人で黙って教科書や問題集を広げて、黙々と勉強する。

辞書をめくる由佳を、時々、近藤は気付かれないように見る。

大きな眼。睫毛。前髪が、つやつや光ってる。染めた事ないんだ
な。

何かに没頭し始めると、キュツと唇を閉める。
首を傾げて考える、シャーペンを持っている指先。

勉強なんて口実に決まってる。ちょっとでも、側に置いておきた
かった。

あの時、どうしてキスできなかったんだろう？

公園で泣いていた由佳の事。

すごく小さくて柔らかくて、頼りなくて。

キスくらい、すれば良かった。そしたら今頃は……。

不謹慎だな俺……。

確かめたかったな……。

もし村田さんが許してくれるなら……。

大事に、誰にも触れさせないように。こんな風に時間を作ってや
りたいな。

でも近藤は、股間に溜まってくる重みも感じている。

許してくれるなら……。

全部……。

欲しいな……。

近藤 5

本をめくる音と、時計が秒針を動かす音しか聞こえなかったリビングに

誰かが帰宅してきた音が響いた。

由佳が、あ、と声を発した。もう、そんな時間？と独り言が聞こえる。

「おにいちゃん、ただいま」

上の妹だった。結構、背が高くてランドセルが小さく見える。

「おかえり」

「お邪魔してます」

由佳が挨拶した。

「こんにちは」

妹が由佳に挨拶した。

「おまえ、さつさと上に行け。邪魔だ」

近藤の心臓が、何故かバクバクしてきた。

「おにいちゃん、今日、何か変だよ？」

妹がニヤニヤしながら、返事をする。

「うるさいよ。あ、これ、上の妹。奈津子って名前」

「いい名前だね」

由佳が笑う。えー？全然、そんな事ないですーう、

そう返事をした奈津子は、照れ臭くなったのだらう。自分の部屋に向かつて行った。

「今、5年生くらい？」

由佳の問いかけに、近藤が答えた。

「6年生」

「へえ、結構、背が高いんだね」

「ああ、そうかな。今、水泳やってるよ」

「スポーツ一家？」

ふふっ、と笑う。うわ、こいつ可愛いな。近藤は再び勃起する。

「あ、ああー、どうかな。突然変異みたい」

「突然変異？」

「うん、親父も、母親も運動音痴なの。でも俺が陸上やってたからなんとなく、下二人も、続いちゃったって感じ」

「ふたり？」

「うん、弟も水泳やってる」

「ふうん。今、いくつ？」

「8歳。今、2年生」

近藤が椅子に座ったままで、大きく背伸びをした。壁の時計を見る。4時だった。

「あとは妹さん？」

「そうだね。そっちは4歳」

「じゃあ、スポーツは、まだまだ先だね」

なんとなく、そのまま会話を続ける。

「ちゃんと挨拶も出来て、運動もしてて。いいね、そういうの」

「まあね。家族を誉められると嬉しいね」

あ、そう言えば。村田さん。お茶、飲まない？」

近藤が立ち上がった。

「いいよ、そんなの全然」

由佳が慌てて、そう言った。

「俺が咽喉、渴いたから。いいの。村田さんのは、ついでだから」

「あ、ごめん……」

「謝らないでいいよ」

飄々と眼の前から消えてしまう。

どうしてだろう。いつのまにか寛いでいたみたい。由佳が一人で赤くなる。

しばらくして、近藤が2リットルの緑茶のペットボトルとガラスのコップを御盆に載せて現れた。

由佳の目の前に、ごく普通にコップを置いて、ごく普通に注いでくれる。

「あ、ありがとう……」

由佳は、つかえながら礼を言う。

「どういたしまして」

近藤が自然に返事をした。

え、近藤くんって、そんな事まで言うの？

由佳が、ビックリしたような声を出した。

「え、何で？おかしい？」

「だって、普通の人って言わないと思う……」

近藤は照れ臭くなって、笑いながら言った。

「なんかさ、俺が行ってた保育所ね。」

園長先生が、そういうの厳しかったんだってさ」

「？」

「おはよう、いただきます、ごちそうさま、ありがとう、どういたしまして。」

「ごめんなさい。とかね。」

「ちゃんと言わせる教育方針だったらしいよ。」

「仕事が終わって、俺を迎えに来た母親が、それ見ててさ、」

「家でも、俺に言わせるようにしたんだって。」

「確かに家に客が来る機会が多かったから、そういう言葉って使えるよな」

「使える、って？」

「大人がさ、誉めてくれるだろ」

そこまで言ってから、近藤は頬を緩める。

「たまに小遣いとか貰ったりね」

「へー……」

私が、そういうの意識したのは、つい最近だったような気がする……。

ちゃんと躰が出来てる人って、いいなあ。

眼を丸くしたままの由佳を見て、近藤が大声で笑った。

「村田さんの前で、俺、ホントは緊張してるんだよ
緊張しなくなったら、多分、言わなくなるよ」

「そ、そうかなあ……」

「そんなもんだって。再開しようか、おべんきょ」

「うん」

ちよつと空気が砕けた。これでいいか。近藤は思う。

近藤が壁の時計を見た。もう6時だ。

「村田さん」

「はい」

下を向いて、一生懸命、何かを書き取っていた由佳が顔を上げた。

物凄く素直な声に、近藤はたじろぐ。4歳の妹でさえ、そんな良

い返事はしない。

「そろそろ、帰る？」

「あ」

由佳が壁の時計を見た。

「うん」

「家の方、大丈夫？……ごめん、こんなに遅くなつて」

「うん、大丈夫。ありがと、ごめんね」

寂しそうに笑った。近藤の胸が潰れそうに痛くなる。なんだこれ。畜生。

こっちまで寂しくなるじゃんか。

「あ、あのさ」

「なに」

「あ、明日も来て貰ってもいいかな」

「え」

「だめかな」

「違う、そういう意味じゃない」

「え」

由佳の顔が、段々赤くなる。

「ほんとに？いいの？」

由佳の顔に貼り付いている

“本気で そんなこと 思ってるんですか！” みたいな表情が 妙におかしくて、心底からゲラゲラ笑ってしまう。

「あのさあ、何だかホントに。未開の土地の人間と喋ってるみたいだよ

面白すぎるよ、村田さんって」

ほかん、とした表情の由佳に続けて近藤が言った。

「だって、夏休みに一緒に出掛けるんだろ？」

「あ」

「それなら別に、こうやって家で一緒に自習する位、いいじゃん」
「ほんとだ」

由佳が、ようやく表情を崩した。

「明日も、来て」

「うん」

二人で、テーブルの上の本やノートを片付けながら話す。

「そういえば、夏休みの約束って、まだしてなかったっけ」

「うん」

「どこか行きたいところ、ある？」

「ま、まだ先だよ？」

「先に予定入れて置かないと、俺が困る」

嘘だった。近藤に、部活以外の用事なんか何にも無い。

それでも、由佳は真剣な顔をして、少し考え込んだ表情になる。

「水族館かな」

「わかった、じゃあ、そこにしよう」

「うん」

にっこり笑った顔の由佳を見て、近藤はようやく満足する。

さっき持ってきた、コップも片付けて、テーブルの上が空になった。

近藤は、それを器用に畳む。由佳も、椅子を台所に返しに行った。

テーブル、と言っても結構ゴツイ。父親が、その上で何枚か製図用紙を置いても

充分、図面が引けるように、職人さんに頼んで作って貰ったものだ。

二人で向かい合わせになって、150センチほど幅がある。

「駅まで送って行く」

「うん」

近藤の言う事は、素直に受けてもいいのかな…、由佳は思う。

外に出て、駅まで二人で歩く。

街の中は、ほんのり、夕餉の匂いがする。

黙って歩いてるけど、気詰まりな空気は無かった。

近藤は一つの言葉を、何度も心の中で繰り返す。

言えないまま、ありがと、と早口で言った由佳が、駅の階段を昇り始めた。

いいえ、と言ったまま、その背中をずっと見ている。

途中、由佳が踊り場で振り向いた。

半分、泣きそうな顔をして、こっちに向かって手を振った。

泣くなバカヤロ。

近藤は、わざと眼を逸らして、そのまま振り向いて歩く。

あれくらいで。

バカヤロ。

近藤 6

明日が終業式という日の夜。

近藤は、何か動作をする度に、ぼうつと考えている。

初めて一緒に帰ったり、駅まで送ってやつたりしてた時間に由佳が見せてくれた表情の、一つ一つを思い返す。

眼を丸くして頬を真っ赤にして、俺を見てた、あの顔。

駅の階段の踊り場で振り返った時、俺を見た瞬間に泣きそうになった、あの顔。

そんなに人に甘えてなかったのか。嘘だろ。

自分には物心ついた時から既に、下に妹がいたし、次々に弟、妹が増えても

面倒を見てやつたり、何かと庇ってやるのは当たり前だと思っていた。

彼等が出来ない事を手伝って、出来るようにしてあげる。

だって自分も、親から、そういうふうになされて来たもの。順繰りにしてるだけ。

それだけの事じゃん。違うのか？ほかの家って……。

今日だってそうだ。たまたま、冷蔵庫にケーキがあったから出してやつたら

「わー」とか言って眼を丸くしやがって。オマエ今迄、生涯に一回位は食った事ないのか。

たかがショートケーキじゃん。苺が乗ってる、よくあるアレだよ？一回はあるだろ。

同性だったら、確実にツツコミを入れてるぞ俺は。

それを……。あの人は本当に、心の底から嬉しそうにする。こっちだってそういうの見たら、何だか哀しくなるほど惹かれてしまっじゃないか。

一緒に出掛けた翌日から、毎日一緒に帰り、リビングで自習をする。

黙々と本をめくり、ノートに字を書き写し、決まった時間に送って行く。

夏休みどうしよう……。来て貰えるかな……。大会とか、記録会がない時だったらいいかなあ……。

まとわりついて甘えてくる4歳の妹を膝に乗せたまま無表情に、ついさっきまで、由佳が座っていた椅子や折畳テーブルを見ていた。

「おにいちゃん、なにみてんの」

「ああ、ごめんね。にいちゃん、ちょっと勉強するわ」

不服そうな妹を、ぎゅうっと一回、抱きしめてから立ち上がる。

……柔らかいな 女の子って。む、村田さんもそうなのかな。そうなんだろうな。

肩の感触は、正直あんまり覚えてないな……。

自分の部屋に入って、ぼうつとしたままベッドに寝そべる。

……俺は、一個だけ、あの人に大きな嘘をついている。たぶん……。もう言えない。懺悔も出来ない……。

そう思いながら、自分の掌を股間に動かして行く。
止められなかった。

由佳つて、呼びたい……。

あの人の事を、本当はリビングじゃなくて、自分の部屋に入れた
い……。

そして、ここで。その髪の毛のゴムを取ってやって、それから……。

胸が苦しい。言えなかった大きな嘘の光景が蘇る。

おとしのちょうど今頃。小遣いを貯めてタミヤのプラモデルを
買った。

日本海軍航空巡洋艦、最上。初めて秋葉原で観て、感動したもの
だ。

勇壮なフォルムに相反して、繊細なパーツの造りの数々。

初めて観た時から欲しかった。手に入れる迄には3ヶ月かかった。

元々は、部活で使うシューズやウェアの新作が見たくて、出掛け
たはずだった。

それでフラフラ歩いていたら時に、最上に遭遇したのだ。衝撃的な
程、それに魅せられた。

ちよくちよく店に通って、いつまでも眺めてた。

祖父がそういう、軍用船舶の写真を沢山持っていたせいもあるか
もしれない。

シューズのお金は最上に消えた。

少し足りない分は父に出して貰い、塗料も、筆も、全部揃えた。

夏休みは、部活でタイムを上げる事と、プラモを仕上げる二つの
事に没頭して終わった。

自分で全部、塗装もして乾燥もさせて、丁寧に丁寧に作った物。

完成した日の晩、ほくほくしながら、リビングのテーブルの上に何冊か事典を重ねて、そこに置いておいた。

唯一にして、最大の失点。ガラスケースを買ってなかった事。

学校から帰ったら、それが粉々になって、リビングの床に散らばっていた。

2歳になった妹が、珍しかったのか、何かの家具に登って床に落とした後、破片の数々で遊んでいた。

バキッと割れた船体、一生懸命に付けたマストや甲板。何もかも粉々だった。

母が父の仕事を手伝う事を再開する為に、妹を、夜の7時まで預かってくれる託児所が決まる、その前日だった。

呆然として、その光景を見ていた自分の目の前。それらを母が、オロオロしながら片付けている。何遍も自分に謝りながら。

妹は破片の中で、一つを手に取りながらキャッキャッと笑っていた。

カツとなって前に二、三步踏み出し、何も言わずに妹を殴りつけた。

訳が分からず泣き出す妹を、更に殴りつける。母が止めに入った。

その母を、振り飛ばすように追い払い、もつと殴る。

「この野郎」

訳が分からずに殴られ、怯えて震え、泣きながら拙い口調で謝り続ける。

妹の、その顔に興奮して、また力づくで殴りつける。

滅多に怒った顔を見せない自分を見て、泣き出した弟に気が付いて、ようやく止めた。

あの9月。たった一回だけ、たった一回だけの事。由佳に言えなかった出来事。

想像の中で、近藤は、由佳の名前を呼びながら、既にスカートをまくり上げている。

それまでは恥じらいながら頬を染めていた由佳が、両腕で拒む。

「いや！」

それを無言で唇で塞ぐ。由佳の腕を、片腕で絡め取って押さえ付ける。

もう片方の手で、乱暴にパンティを膝まで降ろす。

そしてこの俺は由佳の大事な所……、それは既に知っていた。

近藤は想像の中で、由佳をがむしゃらに自分のものにする。

悲鳴は上げさせない。深々と刺しながらパンティを降ろしたばかりの手で、由佳の頬を逃げないようにしてるから。

ちよつと俺に話しかけられただけで、あんなに頬が赤くなるんだから当然、経験はないだろう。

あの時の妹の顔が、急に浮かんできた。近藤は大量に射精していた。

「ああ……」

深い溜息をついて、ベタベタした精液を拭う。猛烈な自己嫌悪が襲ってくる。

まだ恋人同士でもなんでもないのに……。
ごめん……。

近藤 7

終業式の日。朝練は通常運行。近藤は、いつものようにメニューをこなす。

顧問が合図をして、終了になるまでは手抜きをしない。

走る事は好きだ。何も考えなくていい。ただ前に。脚を上げ、地面を蹴る。

その繰り返し。基礎トレも嫌いじゃない。近藤は中長距離を任されている。

ホイッスルの音が長く響く。終わりだ。そう言えば、俺が日直か。今日。

くたくたになって校舎に帰る途中、ちらほらと登校してくる生徒の中、由佳を見つけた。

「おはよう、村田さん」

手を振ったら、立ち止まってくれた。にこっと笑って由佳が、小さく手を振る。

「おはよう」

「今日、早いね。何かあったっけ」

まだ8時だ。いつも由佳は8時20分頃に来てるはず。

「うん、ちよっとね。まみちゃんに数学教えてって言われたから」

「横山？」

「そう」

「図書室で」

「寄りたいけど、無理かなあ……」

横山は、同じクラス的女子だった。確か、近藤と同じ中学の出身だった。

あまり出しゃばるタイプの人ではなかったから、第一印象は薄い。成績はいつも学年で、5番以内に入っている横山が？勉強教えて貰うの？誰かに？？？

怪訝そうな顔をした近藤に、由佳が言う。

「私も、彼女とは話がしたかったから」

「そうなんだ」

「うん」

「そっか。あのさ、水族館」

「うん」

頬を少し赤く染めた由佳が言う。近藤の眼を、真っ直ぐ見ながら。

「ちゃんと、約束は憶えてる。いつにしたらいい？」

「帰りに決めよっか。俺、今日が日直なんだ。先に行く」

「うん」

駆け出した近藤の背中を見送る。背中……広いな。

近藤が慌しく、いつものように教室の引き戸を開ける。教壇の脇で、同級生の男女が抱き合ってキスしていた。

（うおっ！）

体を離れた二人の顔を見ないようにして、自席に就いて手早く着替えた。

そして、学級名簿を職員室に取りに行く。（マズイもの、見ちゃ

ったなあ……)

廊下を早足で職員室に向かって歩いてみると、由佳が対面から歩いて来ていた。

近藤は立ち止まって、呼びかける。

「村田さん」

「なに」

「今日、部活ないから。早く帰れるよ」

「ほんと？」

由佳の眼が嬉しそうに光る。うん、ほんとほんと。

そう言ってから職員室まで、ダッシュする。

部活の顧問に「コラ！」と言われた。気にしない。

俺も村田さんとキスしたい。顔中いっぱい舐めるように、キスしたい。

モヤモヤしつつ時間が過ぎて行く。

近藤と由佳は、いつものように、向かい合わせで自習している。ここは近藤の家のリビング。それも、いつもと同じ。

数学の問題集を広げながら、近藤は考えている。

……今朝、俺が見ちゃったのって？あれ、もしかして陸上部員か？多分、男の方は隣のクラスだろう。

朝練サボっちゃダメだろ常考……、もうすぐ大会なのにあ。

しかし、いいよな。

朝っぱらからキスカよ……。

あれ、まさか村田さん見てないよなあ。

思い出した。武田だ、男の方は。

昨日の夕練の時に「初体験済ませてどうこつ」って
そんな話、してたなあ……。

ぼんやり、由佳の顔を見る。……俺だつてさ。男なんだぞ、そんな無防備で。

昨夜、想像の中で激しく犯していた情景を思い出す。
そして、射精の瞬間に、苦い記憶がフラッシュバックしてきた事も。

ああ、思わず独り言が出てしまう。由佳が顔を上げる。

「大丈夫？」

「う、うん」

「具合悪そうだよ？私、もう帰ろうか……？」

「大丈夫だよ……」

「でも」

「大丈夫、ちょっと部活で気合入れすぎちゃって」

「そ、そう……」

由佳が何となく、居心地が悪そうにしている。

静かに毎日、観察を続けているので、その程度は分かるようになってしまった。

「あのさ」

「なに？」

近藤は熱に浮かされているみたいに、言ってしまう。

「隣り、ちょっとだけ、座ってもいい……？」

急に言われた由佳が、わずかに肩を震わせた。あ……、言葉が出てこない唇の形。

「こ、近藤くんなら、い、いいよ」

「何が？」

意地悪してやりたくなった。何がいいの？そう言いたげに顎を上げる。

その眼はギラついている。自分でも分かる。制服のブラウスの胸元に視線を置く。

「と、隣り。座るの」

声が震えている。更に追い詰める。

「それだけ？」

由佳が、泣きそうな顔をしている。まさか、近藤自身だってこんな言葉は予測してない。

悲しそうな眼しやがって。バカヤロー。嫌なら嫌って言えばいいんだ。

近藤は、それでも続けてしまう。

「それだけ？」

由佳が俯いた。小さく見える。こっち向け。ちゃんと俺を見る。近藤が素に戻る。畜生。

どうしてこんなに真面目に生まれついてしまったのか。神を呪う。こっち向け。ものすごく大事だから。それだけ言いたいだけだから。

「わ、私も、近藤くんには言いたいことがある」

俯いたまま、由佳が言う。その言葉の響きが、何となく悲しそうに聞こえる。

「なに」

「私が可哀想だから、こんな事してる」
俯いたまま言う。

「違うよ」
いいからこっち向け。そんな事なんとも思ってたねーよ。

「だって」

近藤は深呼吸をして、頭を振った。そして言う。

「隣りに座りたい」

「う、うん」

立ち上がった。由佳の肩が、びくつ、大きく震える。脳裏に、妹の顔が浮かぶ。

黙って椅子とノートを持って、由佳の隣りに置いて座る。

由佳は固まったままだ。なんてこった。近藤は心の中で呟く。

「あ、筆記用具持ってくるの忘れた。

ちよつと、村田さんの。貸して」

固まったままの由佳を構わず、勝手にペンケースの中のシャープ
ンを取る。

由佳の広げている大学ノートに書く。英単語の、ずっと下の方に
大きな字で。

“ごめん だいすき”

書き終わった時、かすかに上目遣い。由佳の頬が赤くなっている。

「ごめん」

今度は言葉で言った。

「ううん」

由佳の膝の上に、なんとなく震えて見える握り拳があった。その
上に、自分の掌を置く。

包むように、指を曲げる。由佳が、その拳を広げて裏返す。掌を
握る。

「あつたかい」

ぽつん、と由佳が言った。

「そうかな」

「うん」

「ずっと、こうやってみたかった」

「私と？」

「そう」

「う、嬉しい」

「良かった」

言いながら、近藤は思う。この人は無理に奪っちゃだめみたいだ。それに……。

「あのさ、夏休みも毎日、こうやって会ってくれない？」

「うん」

「部活の大会とか以外の日。毎日会いたい。村田さんと」

「私も会いたい」

「じゃあ決まりだ」

「うん」

近藤 8

夏休み初日。

部活は真面目に出る。近藤は汗びっしょりになった顔を洗い、帰宅する。

1時半に、由佳が来てくれる事になっていた。

電車通学だから大変だろう、近藤が言っていると「大丈夫、二駅だけだから」と返事をされた。

申し訳ない気持ちもあった。反面、家から出してやりたいとも思った。

それよりも何よりも、近藤自身が由佳を、そばに置いておきたかった。

そそくさと着替え、食事を済ませ、ふらりと外に出る。

「迎えに行つてやるか」

本屋で見たい本もあった。ついでに。てくてく歩いて行く。10分程で、駅に着く。

ゆるめの白い半袖Tシャツに、デニムのスカート姿の由佳が改札を抜ける。

片腕に、花柄の大きめのバッグを掛けている。

Tシャツの襟ぐりは大きくて、屈んだら白い胸元が見えそうだ。

ピンク色の大きいハートのプリントが、アクセントになっていた。

髪を結ぶゴムは外していた。昨日、送って行く途中に頼んだのだ。

自分という時だけでいいから、ゴム外して、と。

それが見たかった。自分に従ってくれた由佳を、可愛く思う。

夏休みだから当然なのだが、私服姿は初めて見る。凝視してしまった。

生脚か……、耐えられるか俺。眩暈がしそう。膝小僧といい、太腿といい。

足首が細いのは知っていたけれども、膝の上は、むっちりしていて、正直そそる。

「来てくれたの？」

近藤の視線に気が付いた由佳が、照れ臭そうにしている。

「可愛いのは罪だね」

「えっ」

「いや、何でもない」

頬を染めた由佳は、本当に可愛くてたまらなかった。

並んで歩いてていいんだろうか。そんな事まで考える。近藤の方が赤くなる。

服装は、スポーツブランドの黒のＴシャツにＧパンだった。まあ並んでても大丈夫かな……。

「さっき、電車の中で」

由佳が話しかけてきた。

「ん？」

「柳楽くんに逢ったよ」

「柳楽？」

「うん」

由佳の隣りの席の、陸上部の男だった。

「何かあったの？」

「ううん、別に」

近藤の席は一番後ろだから、教室全体が見渡せる。

柳楽が以前から、由佳に、声を掛けたそうにしていたのは気が付いていた。

それも、あの日曜日以来からだった。だから尚更、由佳が近くにいないと不安だったのだ。

「陸上大好き」な所は俺と一緒にだ。でも、柳楽は……、何となく違う匂いがする。

あいつは……。何の為に走ってるのか分からない。いつでも自分と、誰かの優劣を付けたがっているみたいだ。楽しいか、それって。

「柳楽くんって、トライアスロンしてるんだっけ？」

「ああ、トライアスロンな。あれは凄いよ、俺には無理だもん」

「そうかな」

由佳が立ち止まった。

真剣な眼をして、しかも唇をきゅっと閉じて、こっちを見ている。

まるで“やれば出来る”とでも言いたげだ。

「うん。3000メートルが限界」

何気に話の方向を変える。

「短距離と、中長距離の人のトレーニングメニューって」

「違うよ」

「そうなんだね、そういうの全然、知らなくて…」

近藤は何気なく口にする。

「村田さん、口数、多くなったね」

「えっ」

「そ、そうかな。うん、そう思う。近藤が真面目に返したら、由佳が笑って言った。」

「早く、水族館行きたい。水族館でなくてもいいの」

「そうだね」

「近藤くんと一緒だったら、どこでもいい」

近藤が赤くなった。それって反則……、言いかけて止めた。いやいや……。もしかしたら。ジーンズの下の特ランスの、そのまた下が激しく勃起して来た。

結局、勃起しながらデートの約束をする。近藤の誕生日の翌々日。その日の部活は休む。

それでなくても、8月は合宿もある。お盆もある事で、部員の中には家族と帰省するのもある。

夏休み40日間の10日程を除いて、ほとんど拘束されるのだ。たまにはいいだろう。案の定、由佳が尋ねる。

「部活、休んで大丈夫？」

「一日くらいなら、大丈夫」

「そう……」

「8月に入ったら、すぐに合宿があるんだ。3泊4日、泊りがけでそこでトレーニング漬け。」

そこで一所懸命、頑張るから大丈夫」

「合宿？どこに行くの？」

「千葉。部長が言ってた。競馬学校の近くらしい」

「競馬学校？」

「うん、その辺。強制参加。その前に、ちゃんとデートしたいんだ」

「うん」

ちよっぴり由佳が不安そうな顔をした。

「間近になったら、ちゃんと言っよ」

由佳が頷いた。近藤もほっとする。

なんとなく“日常”になってしまった、この“二人で自習”の習慣が、ぽっかり無くなってしまったら。

そう考えてしまうのは、近藤でも理解できたから、なるべく安心させたい。自分でも安心したいのだ。

いつものテーブルに向かい合わせになって、たまに雑談をしながら二人は黙々と、夏休みの課題を片付ける。今はこれでいいのかな……。

近藤は、問題集を真剣な顔で見つめている由佳を見て思う。

……

近藤と改札口の手前で別れて、ホームに向かう。電車が来る。扉が開く。足を踏み出して車内に入る。

電車の進路が日陰に差し掛かった所で、由佳は窓ガラスに映る自分の顔を、ちらりと見る。

頬が上気してるのが、誰にも分からなかったらいいのにな。

さつき、改札を抜ける直前に、近藤が耳元で言った言葉。

「村田さん、大好き」

たった一言なのに、どうしてこんなに気持ちが落ち着かなくなるんだろう。

何の返事も出来なかった。申し訳なかったな……。

それにしても……。以前に絡んで来た時の近藤は怖かった。

誰もいない家の中で、どこに逃げたらいいだろうとも考えた。あれがあったから、ついつい何かと躊躇してしまうのは事実。

近藤くんも、男なんだ……。

小学生の時、酔った父親から、Ｔシャツを破かれそうになった事を思い出す。

何とか逃げて、事なきを得たけれども……。あの時から心底、異性が苦手になった。

いつかわたしも……。？ 冷房の効いた電車の中、体が凝固する。

ぼうつとしていた時、誰かが自分を呼んでいるのに気が付く。

「村田さん……！」

顔を上げると、横山だった。別人みたいに見える……。動揺しながら挨拶をする。

「横山さん、こんにちは」

「固いよ。村田さんって。フツーでいいのに。私服の時でも“委員

「長！！」って感じー」

横山は、屈託なく笑った。

学校では目立たないようにしている、横山の姿しか知らない由佳が、眼を丸くしている。

真っ白いブラウスは、フリルが大きいものの、そのV字の襟元は深く、第一ボタンは、多分、乳首と乳首の間の位置すれすれである。瞳は大きくて、少しだけ吊っている。

ずっと伸びた鼻筋や、ぽってりした唇。化粧もしているから、誰も高校一年生とは思わない。

（横山さん、おっぱい見えてるよ上から……）

背の高い男なら、覗いて見てもおかしくない。現に、由佳の方が横山より5センチほど身長が高い。

同性でもドキドキするのだ。やはり、同じ高校生とは思えない。

「み、見えちゃうよ。横山さん」

「何が？」

悪戯っぽい言葉の響きに、面食らう。目線を落とすと、ピンク色のタイトスカート。

「う、うーん」

由佳は同級生の意外な一面に、絶句していた。

「びっくりした？」

「うん、すつごく。今、びっくりしてる」

横山が「うふっ」と肩をすくめた。つられて笑ってしまう。

「村田さん、近藤くんどこに行ってきたの？」

「うん」

「いいなあ。私も彼氏が欲しいな」

「か、彼氏だなんて。そんな」

「でも有名だよ？近藤くんね、同じ中学だったでしょ。前から知ってるけど、最近すごく変わったもの。私、中1の時、同じクラスだったの。その頃から知ってるの。でも向こうは覚えてないみたいなんだけどね」

由佳は赤くなった。気が付いたら、自分の家の最寄駅を乗り過ごしている。いやだ、どうしよう。どうかしたの？

「乗り過ごしちゃった、駅」

「え、ほんとう？」

横山が慌てた。一緒に次の駅で降りようよ、私の待ち合わせは急がないから。

引き止めちゃってごめんね。そんな風に言う。一旦は断ったが、横山の真剣な眼差しに根負けする。

電車の扉が開く。

夕方の風が吹く、ホームに降りた。

「ごめんね、近藤くんの話、してたから」

また茶目つ気たつぷりで、由佳に言う横山に、つつい「しょうがないなー」と言ってしまう。

そんな由佳を見て、横山がポロッと本音を出した。

「案外、話やすいんだね。村田さんって」

「横山さんだつて、そうじゃない」

「ああ、私？」

ホームで、けらけら笑い出す。二人で反対側のホームまで歩く。制服を着て、一歩外に出たら変わるようにしてる」

横山の父は代議士だった。その一人娘だという事で色々と心労もあつたろう。

「そうなんだね。そんな格好して、デートかと思った」

「こういう服装してたら、逆に男が寄って来ないよ？今日の姿は、

内緒ね」

うん、と頷いた由佳に、横山が続けて言う。

「村田さんの方こそ、折角の夏休みなんだから。デートとかすればいいのに」

「こ、今度行くの。実は」

「えー、いいないいな」

女子高生の会話なんて、所詮はこんなものだろう。それでも横山の言葉には悪意が無く、素直な人柄が伝わって来た。

「どこに行くの？良かったら教えて」

「す、水族館……」

もじもじしながら言う由佳に、横山は「いいなあー」と呟いている。

由佳の学校では、女子は女子同士、男子は男子同士と、隣のクラスと合同で体育の授業を行うのだが、その時に、一緒のバレーボールのチームになったのだ。それで少しずつ挨拶を交わすようになったのが横山だった。体育の時間が終わって、教室に帰る時に横山から話しかけて来た。今度、数学教えて。

「私、ホントは私服で出掛けてる時に、知ってる人に逢っても、こんな風に声掛けたりしないの。」

村田さんだから、声掛けたくなっちゃった」

「あ、ありがとう……」

モデルみたいに可愛らしい子に、そんな風に言われてしまった。

同じ歳のはずなのに緊張するのを感じてくる。

しばらく雑談してから横山は、「またね」と手を振って、由佳と向かい側のホームに行ってしまった。

自分の家に向かって歩く道は、何となく荷物も足取りも重たく感じる。

でも、今日は早く布団の中に入りたかった。

早く寝たら、近藤に逢えなくて寂しい気持ちも紛れて済む。そう思っていた。

いざ布団に入ってみると、なかなか眠れない。

終業式の前々日だったろうか。自分の見た衝撃的なシーンを思い出す。あの朝、横山に数学を教えてあげた後、いつものように教室の引き戸を開けた時に、隣のクラスの陸上部員と、自分の席の後ろに座っている女子が、抱き合いながら何回もキスを繰り返していた。

びっくりしたまま引き戸を閉め、一回引き返した。心臓が胸から飛び出そうになっていた。

映画やドラマで、そういうシーンは観た事があつたし、その先に何の行為があるかも知っている。

でも実際に見たのは初めてだった。あんなに大きい音がするものなのかと思った。

おまけに男子の方は、プリーツスカートをまくり上げて太腿や尻にまで、手を這わせていた。

学校の中、しかも教室で。朝からそんな事まで、しなくてもいいじゃない……。

そこまで悶々と考えて、ハツとする。

「近藤くん、観たんだ。あれ」

それで合点がいった。あのギラついた視線の理由が、由佳にも分かった。再び、胸がドキドキしてくる。

近藤くんも、あんな事したいのかな……。もし、そうになったら……。

また悶々としてきて、眠れなくなった。

近藤 9

二人とも、それぞれに思う所ありつつ、過ごしている夏休みになりそう。

とりあえず明日は近藤の誕生日……。そんな日の出来事。

近藤が部活から家に帰る途中、雨が激しく降ってきた。

通り雨だったらしいのに……。と思っていたけれども、どうも止みそうにない。

部屋に入って着替えを慌てて済ませ、外に出る。

右手で黒い傘を差し、左手には母の花柄の傘を持ち、急いで駅の方角に向かった。

（今日の天気予報で、雨が降るなんて言っていないぞ……）

気温が朝から高かったのは分かっていた。

最後の柔軟体操が終わる頃に空が急に暗くなり、急に土砂降りの雨が降って来たのだ。

時間的には、由佳がこっちの駅に着く頃だ。もし遅れるなら遅れでもいい。

二人とも、携帯電話を持っていない。

（逢いたいけどさ……）

近藤はそれほど必要と思っていたし、由佳は親にねだるのが嫌だったから。

こういう時に、困るんだな……。そう呟きながら、由佳の姿を探していた。

どこかで雨宿りでもしているならいいが、万が一でも、ずぶ濡れになっていたら可哀想だ。

5分も歩かないうちに、最近建ったばかりのマンションの、エントランス手前で郵便受けの陰にぼつんと立ったまま困った顔をして、空を見上げている由佳を見つけた。

「村田さん…！」

近寄ると、かなり濡れている。

白いＴシャツは、ベツタリ胸に張り付いて、淡いピンク色のブラジャーが見事に透けていた。

髪の毛も、びしょびしょになっている。このままだと完全に風邪を引かせてしまう。

なんか可愛いブラジャーしてんじゃない…。

近藤の視線を感じた由佳が、あっ……、と慌てながらハンドタオルで胸元を隠した。

「大丈夫？」

「う、うん……」

「どこらへんで降って来たの？」

「駅を出て、ちょっとしてから……」

由佳の足元を見た。スニーカーも、ぐしょぐしょに濡れている。

「ごめんね、来るのが遅くなって」

「ううん」

「申し訳ないけど、家まで歩ける？服とかさ、乾かさないと風邪引くじゃん」

そこまで言って、近藤は言葉に詰まった。今、家には誰もいない。そこで着替えて、それから……。

「ありがと、近藤くん。でも、大丈夫だから」

由佳が無理に笑顔を作って、近藤を見上げる。

「その傘だけ、貸して。コンビニも遠いから、傘が無くて困ってたの」

土砂降りの雨の音が耳に響く。こんなに近くにいるのに。甘えてくれたらいいのに。

「風邪引くよ」

「大丈夫」

近藤は、由佳の眼を見る。困ったような、泣きそうな眼をしゃがんで。……強い口調で従わせる。

大概こうすれば、弟も妹二人も従うので、近藤の、なんとなくの癖になっていた。

「だめ。ちゃんと、服も髪の毛も乾かさないと。雨が弱くなったら帰ればいい」

「でも」

「とりあえず歩こう」

有無を言わず、左手に持っていた傘を手渡した。由佳がそれをおずおずと受け取る。

並んで歩き、家に入れる。とりあえず玄関に待ってもらい、バスタオルを持って来て渡す。

迷子になって、おまけに雨に降られた犬みたいだな。怒られるから言つの止めとくか。

「それで足を拭けばいいよ」

「ありがとう」

由佳が、ようやくほつと溜息をつく。

小さな吐息は作偽的でないせいか、下半身を刺激する。気が付かれないように、後ろを向いた。

「靴下、脱いでもいいかな……」

「うん」

つま先まで、べったり濡れてしまっている由佳は、緊張しながらも丁寧にタオルで拭いて

近藤の後ろを付いてリビングに入った。

「ちょっと待ってて」

段取り悪いな俺。さっきまとめて渡しとくんだった。

ぶつくさ言いながら2階に上がり、自分の部屋から真っ赤なTシャツと、お気に入りのブランドの黒いジャージのズボンを探した。リビングにいる由佳に渡しながら、弟や妹に言うのと同じ口調で、さっきみたいに言ってしまう。

「シャワー浴びてきな」

言った瞬間、あっ、と思った。案の定、由佳の顔がみるみるうちに赤くなる。

「あ、あのね、へ、変な意味じゃなくって」

「うん」

「うん？え？」

「わかってる」

由佳が、真っ赤になりながら、クスクス笑っている。

「なんか今の言い方、“おにいちゃん、めっちゃ怒ってます！”みたいに聞こえた」

「だってさ……」

「近藤くん、いつもごめんね」

「なにが？」

「何でも。心配掛けちゃうから」

「いいよ全然」

うん……。こっちから視線を外さないで頷く由佳を見ていたら、

本当に襲いかかりたくなってくる。

「あ、あのさ、村田さん」

「なに」

「シャワー、浴びないと、体が冷えちゃうよ。変な事しないから、ちゃんと言う事聞いて」

ホントはしたくてしくて、堪らないんだけど。とりあえず言う事で、自分にも相手にも保険を掛ける。

「うん……」

「あ、俺、赤いＴシャツ持ってきたか。ちょうどいいや。ブラジャ―も濡れてるから外しなよ」

にやにやしてみた。

「バカ」

「乳首は透けにくいよ赤だから。厚手だし。立っても大丈夫。うひひ」

歯を出して、にやにやと笑ってみる。

「ひ、ひどい」

「だって風邪引いたらデートできないじゃん。楽しみにしてるのに」

“早く行け、行かないと襲うぞ”と、念を飛ばしながら姿勢を変え、折畳みテーブルを広げにかかる。

「あ、ありがとう。ちょっとだけ使わせてください」
「うん」

パンティーは濡れてるまんまか……、まあしょうがないか。白々しく、ぶつくさ言いながら近藤は由佳の背中に呼びかける。

「村田さん、バスタオル新しいの使っていていいから。風呂場の横のチェストって言うの？そこにある」

「ありがとう」

濡れてる服は、後で洗面所の乾燥機に突っ込んだらいいな。うん。

近藤の家の風呂場の扉は、全面、磨り硝子になっている。

よくある間取りだとは思うが、脱衣場の向かい側がトイレ。

奈津子は自分が用を足しに行くと「おにいちゃんのエッチー！」と、わざとらしく言う時もある。

さすがに下の妹の亜紀子は「やーだー」程度だけれども。

実際、結構透けて見えるのだ。そう言えば。この家を、設計したのは父だった。

父にしてみれば、母の裸を見る機会に恵まれていいかもしれないが、子供が増えてきたらそれはそれで困る。

（村田さんの裸が見えたら、鼻血が出ちゃうな。俺）

一瞬、ニヤニヤしてしまったけれども、ここはぐっと我慢しよう

…と、思い直す。

（トイレに行かなきゃいいんだよな、うん）

テーブルの上で、赤本を広げてみたりしている。

今日は特に、全然、頭に入ってきて来ない。

・・・

由佳が頭にバスタオルを巻きつけて、リビングにやってきた。やはりＴシャツもジャージも、サイズが大きかったようだ。

何でこう、同じ歳くらいの女子がサイズの大きい男物を着ると、
やたらセクシーに見えるのだろう。

ジャージのズボンから見える、くるぶしや、かかとが生々しい。

「近藤くん、ありがとう。体、あつたまつたよ」

「よかった」

近藤は、子供みたいに頬を上気させて、礼を言う由佳を見ている
うちに、また勃起してくる。

同じような“頭にバスタオル”は妹や母で見た事はあるが、年頃
の女の子がしていると、やっぱり印象が全然違う。

色白で頬が丸くて、眼が大きい由佳が、それをしている。

顔では、にこにこした表情を作りながら、由佳から隠れて見えな
い股間に掌を当てて押さえる。

本当にヤバイ。テーブルをひっくり返して、飛びかかりそうにな
るくらいヤバイ。

そんな近藤を知る由もなく、由佳は自分の鞆から筆記用具や教科
書を取り出して、いつものように勉強を始める。

近藤も知らん顔をして、自習を始めていた。いつの間にか集中し
ていた。

少し経ってから、あ、と思って呼んでみる。

「村田さん。水族館に行く日、待ち合わせどうしよう?」

顔を下に向け、英単語から眼を離さないままで問いかけた。返事
がない。

「待ち合わせどうする?」

もう一度、言ってみた。やはり静かなままだ。

「ん?」

近藤が顔を上げた。寝てる。シャーペンを持ったまま、由佳が寝ている。思わず嘖いてしまった。

それでも起きない。

「無防備な人だなあ……」

呟いて、音を立てないように自分の部屋に上がる。ベッドの上から毛布を引っ張り出した。

リビングに戻った時は、今度は突っ伏した姿勢で寝ていた。

そっと肩に掛けて、前に回り、シャーペンを指から外してやる。

その時、少しだけ肩が動いた。

毛布が、肩からずれて床に落ちた。あつ、と思った近藤が、毛布を拾う。

かがんで、目線を下から上に移して行った時、ドキツとした。

突っ伏して寝ている由佳の、Ｔシャツの袖がめくれた腕の付け根を見たから。

大きな青紫色の痣。

もう片方の腕の付け根にも、あるのだろうか。確かめる勇氣は無かった。

初めて見た時、前髪に隠れたところにあったそれよりも、色濃くて、しかも大きい。

涙が浮かんでくる。まばたきをしたら、それは頬を伝って行った。

静かに、毛布を由佳の肩から、大きく覆うように掛けた。

何故、今迄、気が付かなかったんだらう。

さっきのマンションの郵便受けの所では、正面を向いていたし、そこまで目配り出来てなかった。

親にそんな酷い事をされていても、淡々と自分に逢いに来てくれて。

泣いてもいいのに。それくらい、全然構わないのに。

洗面所に顔を洗う為に動く。顔をざぶざぶ洗っても洗っても、涙が止まらない。声を殺して近藤は思う。

…村田さん

…あなたが嫌がる事は、したくない。

熟睡している由佳を見ていたら、勉強する気はとうに失せてしまっていた。

余りにも無防備すぎる人の寝顔を、まじまじと見る。ふっと思う。多分、自分の願いは少しだけ叶ってる。

誰にも邪魔されないように、この人の時間を作ってあげているんだ。

近藤は、少しだけ唇の端を緩めながら、リビングにあるテレビのそばに寄った。

イヤホンを耳に就けて、適当に父が持っているDVDを観ながら、時々、由佳の方を見る。

こちら側から見えるのは、バスタオルを高く盛った頭と毛布の塊だけだ。寝てる。こんちくしょう。

ノーガードにも程がある。

映画を観ながら色んな事を、ぼんやり考えている。同じ様に、ただか15、6年くらいしか生きてないのに、どうしてこんなに人生は不公平なのだろう。

俺んちの妹に生まれてきてたら良かったんだ。一歳違い位で。そしたら絶対に、あんなに寂しい笑顔なんかさせていないのに。待て、近親相姦？それはなあ。

でも確信する。もしも村田さんが妹だったら、理性は吹き飛んで

いるだろう。

どうして俺の部屋が2階にあるんだ。1階だったら警戒心なく誘いやすいのに。

ぽかんと開けた小さな唇に、触れたくてたまらないのに。毎日、ものすごく我慢してるのに。

…でも今の村田さんが、許してくれるだろうか？

唇に触れるだけでいいのに。あのダメダメ目線が近藤を怖気づかせる。何だかんだ言って嫌われたくない。

近藤の目線はさつきから、微動だにしない毛布の塊にある。

急に、殴って泣かした時の妹の顔が思い浮かぶ。

妹や弟はいいよな…。父さんや母さんから叱られて泣けるからな。そう言えば、村田さんの前で泣いてしまった日よりも前に、泣けたのはいつだっただろう？

見栄や体裁から一番離れた所を、由佳はいつも突いてくる。心の一番、柔らかい所を不意打ちしてくる。

だからか。いつもあの人の前でだけ、泣きたくなる。村田さんは多分、そんな自分を蔑んだりしない。

ヤバイ俺ほんとに泣きそう。

「…近藤くん？」

振り向いた。由佳が照れ臭そうに、低い姿勢で額をぼりぼり掻いていた。毛布の存在にも気付いた様だ。

「寝ちゃったんだね、私」

「うん」

背中だけ斜めに曲げて、ニヤニヤしながら返事をした。

「恥ずかしいー」

ホントに恥ずかしそうな声で、顔をテーブルにくっつけて、ぱたぱた足踏みをしてる。思わず嘖き出してしまう。

「よく寝てた。起こすのも悪くてさ」

カーペットに座ったままの姿勢で言った言葉に、「いやーん」そう言いながら、また足踏みする。

「意外な姿だ」

「な、なにが」

「多分、俺だけなんですよ。そんな事が出来る人の前って」
「うるさい」

眼だけで睨んで来た。

だいぶ言うようになったじゃん。いいぞ、もっとだ。そんな感情が、緩やかに近藤を満たす。

「ノド乾かない？」

「乾いちゃったかも」

「じゃあ待ってて」

立ち上がって台所に行き、麦茶のペットボトルとマグカップを二つ、テーブルの上に置いた。

由佳が近藤を見上げる。その視線に鼓動が急に高鳴った。由佳には聴こえていない。

それでも緊張する自分を知覚する。お互いに視線を外すタイミングが見つからない。

由佳の眼に映る近藤は、どこまでも優しく温かい「違う世界の人」

だった。

……あんな優しい眼をしてるけど、私を脅かしに来てるのかもしれない。一瞬、思う。

そして、わずかな緊張に耐えられなくなったのは、由佳の方だった。開き直り切れず、目をそらす。

「近藤くん」

「はい」

「飲みたい」

「はい」

近藤が二つのマグカップに麦茶を注いだ。

「ありがとう」

「いいえ」

「さっき、泣きそうな顔してた」

「え？ああ、映画でね」

「…ポリスアカデミーだよ」

「え？」

ちょうどエンディングになっていた。だいぶ昔の映画みたいだな。親父は回顧厨か。もっとマシな映画集めろよ。

「村田さんも知ってるんだ、これ」

「面白いよ、ってレンタルビデオの人に勧められたの。ホントに面白かったから」

「へえ。僕たちって案外、昔から繋がっていたのかも」
「バカ」

こいつ本気で寛いでやがる。近藤は、自然と頬が緩む。

「うんそう。そんなバカな俺から御願いが」

「なに」

「手、つないでもいいかな」

由佳の眼が微かに大きく見開いた。もう一度尋ねる。

「いいかな」

頷いた。

テレビのスイッチを切って、由佳の隣りに椅子を置いて座る。そんな少しの時間が、物凄く長く感じる。

ことん、と椅子の脚が床に着く音だけが響く。自分も毛布を肩まで掛けた。

「村田さん」

言いながら、由佳の手を黙って握り締めた。由佳が黙って受け入れている。戸惑っているのかもしれない。

その手を強く握り締める。しばらくしてから、由佳が握り返してくれていた。満足しすぎて眠くなる。

いやいや、もうちょっと…。

「あのさ…」

「なに」

「ほっぺたと、唇、触ってもいい？」

俯いたままの由佳の肩が、ピクツと動いた。

「うん…」

「…こっち向いて」

由佳がバスタオル頭を動かして、近藤の方を向く。
片方の手を繋いだまま、もう片方の掌を、そっと頬に当てる。

「すべすべしてるね」

ほんのり赤くなった頬で、まっすぐ近藤を見ている。

「こ、近藤くん」

「なに」

「私、今、すごく。は、恥ずかしい」

「俺も」

近藤 10

近藤の呼吸が荒くなる。

頬を覆っていた掌を外し、人差し指と中指を由佳の唇に持って行くとした、その時。

玄関の扉が、ガン、と大きく開く音がした。二人とも、ビクツ！と体を震わす。

「ただいまー！」「おにいちゃん、いないのー」

近藤は、弾かれたように毛布から出て、廊下に出て行く。同時に由佳は寝た振りをする。

奈津子と、弟の芳樹が「おかえり」と言っ近藤の姿を見て、やかましく水泳クラブの報告を始めた。

「シーツ」

近藤は自分の事も落ち着かせるように、人差し指を立て、自分の唇の前に持って行く。

「リビングで、おねえちゃんが寝てるから、静かに」

さすがにまだ小学生児童は可愛らしく、年長者の言う事には素直に従う。善い事だ。

芳樹が目をくりくりさせて、小声で近藤に尋ねた。

「おねえちゃん？誰？」

「あのね、おにいちゃんの彼女」

奈津子が、芳樹に耳打ちした。

「奈津子？帰り時間、早くないか」

「あともうちよつとだったのに。」

「普通だよ？もう5時半だもん」

えっ、もうそんな時間？早いなあー。白々しい演技で、頭をかき

むしってみたりする。

雨止んでた？うん、もう止んでるよ。

なんとなく聴こえてくる兄弟のやり取りを、背中であいていた由佳は、笑いを堪えている。

「村田さん、起きて。服、乾燥機に入れよう」

「そうだった。忘れてた、私」

呼びかけて合図してくれる近藤に、由佳が噴き出しそんな顔で、毛布を外してみた。

芳樹が、近藤そっくりの顔を紅潮させながら挨拶してくれる。

「おねえちゃん、こんにちは」

「こんにちは」

洗面所に行くと、近藤が乾燥機の前で、ブラジャーの裏側をしげしげと眺めていた。由佳に言う。

「村田さんの胸って、大きいの？」

「し、知らない……っ！」

真っ赤になって、近藤から取り上げた。

「ごめんごめん。すぐ乾くよ」

由佳が脱いで畳んでいた服一式と、ブラジャーを乾燥機に放り込みながら、そう言った。

「ありがとう」

「乾いたら、着替えればいい。そしたら駅まで送って行く」

「あのう」

「なに？」

「わがまま言ってもいいかな……」

言い辛そうにしている。なに？もう一度尋ねた。

「家の近くまで……、近藤ちゃんと居られたら嬉しいなって」

「いいよ」

「よかった」

ほっとしたような顔で、由佳が近藤を見上げた。

「何で早く言わないの」

由佳の家は、駅から歩いて5分程の所にあると聞いていたから、今迄、家まで送るのは考えてなかった。

「だって」

「だって、なにさ」

照れ臭そうに頬を赤く染めて、下を向いた由佳が無愛想な口調で答えた。

「私も、近藤さんに甘えたい。妹さん達みたいに」

「そういうのは、もっと早く言ってくれてもいいのに」

「うん」

由佳も嬉しいかもしれないが、近藤も別の意味で嬉しい。他人に甘えられないこの人が、自分に心を許してくれる。

由佳の家の近くまで行ってみる。

改札を出て、本当に少し歩いただけで、案外に築年数が経っていきそうなマンションがあった。

それを由佳が指差して「あそこ」と言う。

「ほんとに近いね」

近藤は、顎をしゃくり上げながら笑った。

「あんまり近いから言い出せなくて……」

「いいよ」

「ありがとう」

「いいえ」

15センチ程、視線を上げて、じっと近藤の眼を見ている。吸い

込まれそうになる。

このまま路上で押し倒せたら、どんなにいいだろう。だけど、反面。

無垢なまま取って置きたい気持ちも、初めて湧き上がる。

……でも他の男には渡したくない。大事に、大事に。この人の事を。

「あのさ」

「なに」

「水族館に行く日、ここの駅で待ち合わせしよう。朝10時。いい？」

由佳がまるで、花が咲いたように笑って頷く。

「明日、走るの見に行きたいな……」

「来てくれるの？」

「だめかな」

心なしか、由佳の眉毛が8時20分の形になった。

「そんな事ないよ、頑張るし」

自分の競技を見に来てくれる人が、母親以外にもいるなんて。照れ臭いけど嬉しいものだと思う。

「どこらへん？」

競技場を教えた。自分が出る種目の、大体のタイムスケジュールも。

「行くね」

「うん、ありがとう」

「そ、その後、また自習しに来てもいいかな……」

由佳がばちばち、まばたきをする。

「もちろん」

「よかった……」

頬が赤くなつた事、多分、由佳は気が付いていない。

可愛いな……。

「む、村田さん」

「はい？」

「……いや、ごめん。何でもない」

由佳が、言いよんだ近藤の手を取って握りしめた。

「あのね、わ、わ私、今日初めて分かった。誰かがいてくれるのって、すごく……」

近藤が、何も言わずに頷いた。由佳の眼が、少し悲しそうに揺らぐ。

「また明日ね……」

由佳は背中を向ける。

歩き出す人を近藤は見送る。胸が痛い。

多分、今の俺は泣きそうな顔してるんだろう。それは確信する。

駅を出てから、本屋で立ち読みをする。ふっと外を見ると、もう既に暗かった。

帰ろうかな……。

自宅へと歩く途中、結構大きい神社がある。なんとなく御参りしたくなった。境内の脇の電柱が白く明るい。

口笛を吹きながら境内へと続く、緩い坂を登り始める。もう少し足を進めると、舗装された道の脇に、夏になると野良猫が集まるべ

ンチがある。

かすかに、やたら甘い声が聞こえてくる。猫の交尾だろうと思つて、そのまま進もうとする。

ベンチまで、まだかなりの距離があつたはず。それでも本能が近藤に教える。猫じゃない。女だ。

そう確信した瞬間に、近藤の鼓動が激しくなる。

立ち止まったまま眼を凝らすと、見覚えのある顔が見える。約20メートル程の距離…。

（えっ…?!）

電柱のほのかな灯りに、浮いて見える武田がいわゆる後背位で、女の子を責め抜いている。

声を出さないように片方の手で、女の子の唇を塞いでいる。

それでも、女の子の理性では抑えられない位、快感は強烈らしい。ベンチの背もたれに両手を掛けて仰け反る彼女は、がくがく震えている。

あまりにも体が反応するので、武田の手が追いついて行かないのだ。

その度に甘い声が漏れる。よく響く甘い音。武田の吐息まで聞こえてきそうだ。

心臓の鼓動が、違う意味で、ますます高鳴る。振り向いて何事もなかったように坂を下る。

俺が見たって、アイツ分かってないよな…？

初めて生で見た、他人のその場面。

家に着いても、あの声が耳から離れてくれない。村田さんも……あんな風になるんだろうか。

そこまで思っで、初めて近藤は苛々してくる自分を自覚した。由佳を裸にする。有無を言わさず犯しまくる。

優しくしてやりたいのに……。

ごめん……。

そう言いながら、腰を力任せに突き入れて行く。満足なんかしない。そうしたい。そうなったらどんなにいいか。

射精して初めて我に帰る。射精する事で、そういう欲求を放出している事に、近藤は自分で気が付いている。

全部……。貴女の全部……。俺に下さい……。

近藤は朝5時に眼が覚めた。

いつも校外での競技会などの日は、朝早く眼が覚めてしまう。部員達は個別に現地に向かう。時間に遅れるのはイヤだった。

ゼッケンを付けた半袖の体操服と、短パンを身に就けてから、近藤は「あ、しまった」と独り言を言う。

「どうしたの」

朝起きて、朝食を用意してくれた母に答える。

「何でもない」

……昨日オナニーしちゃった。走れるかなー。

ま、何とかなるだろう。

それに今日は村田さんが来てくれるんだし、カッコ悪い所は見せられない。

自分が出る種目は800と1500だ。さっき着た物の上から、学校の長袖体操服を更に着る。

スポーツ飲料や、カロリーメイト、スパイク、タオルをガサゴソとバッグに詰めて、家を出た。

天気がいい。風もそれほど強くない。よし。唇を結んで、前を見る。

昨日は軽めに走っていた。

隣の市の競技場に、電車を使って向かう。すり鉢状になっている競技場。ここは何回も来てる。

簡素な開会式を過ぎたら、あつと言つ間に各競技の準備を係員が整える。

大概の場合、800メートル種目の方が、プログラムの前の方。400メートルトラックを2周する。体力・知力の過酷なレース

がもうすぐ始まる。

競技場全体を見渡した。ここは、中学の時にも使った競技場だった。

入学してから今日に至るまでの競技大会で、ここの競技場は使われた事が無かった。

地の利は俺にある。直観した。横に視線をそらしてみる。

自分が走るトラックのスタートライン横には、走り幅跳びのコーナ―があつた。

800メートルに出場するのは、近藤の高校からは今日は3人だ。1年生は近藤だけ。それぞれ3人とも、別々の組になった。近藤はスパイクに履き替える。

ピンの長さは4ミリ。それは近藤の場合は変えない。1500もこのまま走る。

スパイクに履き替えた瞬間、近藤の頭は空っぽになる。前を向く。風が頬に当たる。

近藤は4組目だった。他の2人は後に続く。

ホイッスルが鳴った。集合だ。

思い思いに体を動かしながら「陸上の格闘技」とも呼ばれる、800メートルトラックに向かう。

自分に当てられたポジションは、アウトコースの一番端だった。まあいい、こっちの方が走り易い。

120を過ぎたら、少しずつ前に出れば。唇の端を上げた。

8人並ぶ。アウトコース。幾度となく頭の中で描いたイメージ。

ああやればいい……。

ピストルが鳴った。

腕を振る。脚を上げる。前にいる選手を風除けにしながら進む。細かい吐息がうねりのように固まって動く。途中までは決められたコースから動けない。2周目からは駆け引き。ゴミゴミした集団の

中、誰かのスパイクが脚に当たる。これもレースの醍醐味。このままではたまるか。思いつき切り差してやる。前に。額に風が広がる。ぐんぐん踏み出す。

ふたり500の地点で抜いた。残り300だ。行け！心の中で叫んだ。

力を振り絞り、ゴール前、もうひとり捕らえたのは覚えていた。近藤っ！！先輩や同級生の歓声が聞こえる。

トラックの上でひっくり返った。係員が、近藤の上から覗き込んでいる。

「大丈夫？さつさと動いて」

「あ、は、はい」

ぴよこん、と立ってみた。立てる。走り切ったこの時間が凄く好きだ。

ひよい、と横を見ると、部長が満面の笑みを浮かべて近寄ってきた。

「お疲れさん、この組で2着だ2着」

「マジっすかー！」

「いいよ近藤、すごく良かった今の」

部長が興奮した口調で言っている。ふたりで隅に寄った。他にも続々と走るメンバーがいるからだ。

「くうつ、俺1着取りたかったのにですなーっ」

呼吸を整えながら、部長に伝えた。

「僅差だったと思う、あれは」

「んー、悔しいなあ……」

「気にすんな。まだ午後もある」

「そうですけどね」

またピストルの音が鳴った。ぐずぐずしてられない。この次の

組には、先輩達が出る。応援席に行かないと。

戻る途中、ひとりの先輩が声を掛けてくれた。

「やったなあ、近藤」

「あ、ありがとうございます」

席に着いたまま、柳楽が珍しく「お疲れ」と言ってくれた。

「サンキュ」

「委員長、来てる」

「え、どこ？」

「こっからじゃ観えねえよ。いいよな、おまえ」

そう言っただけ、どこかに行ってしまった。柳楽が出る3000は午後のはず。まあいいか。

今日、この競技大会で行われるトラック種目は、50メートル、100メートル、200メートル、400メートル。そして800メートル、1500メートル、3000メートル。

メートルは略して、単純に数字で呼ぶ事が多い。プログラムにも書いてあるのは略称だった。

……自分の誕生日に、幸先いいな。軽く周りをジョグしながら、体が鈍らないようにしていた。

あと5分、走ったら休憩しよう。

近藤は、自分で自分を誉めてやる。あとは午後の1500だ。走りながら、大きく背伸びをする。

背中から小さく声がする。

「近藤くん！」

振り向くと、頬を紅潮させた由佳がフェンスに指を掛けて、自分を呼んでいたのが分かった。

半袖のダンガリーシャツの上半身が見える。「あ、村田さん」
ジョグを止めて駆け寄った。由佳の真下の位置で、手を振った。

「見てた？今の？」

「うん、見た見た！！」

気が付くと由佳の50センチ程の隣り、見覚えのあるような……、無いような……、サングラスを掛けた女の子がいるのに気が付いた。サングラスの女の子は、近藤の方を見てはいないらしい。顎を上げて走り幅跳びの選手達の方を見ていた。

「初めて見た。陸上って凄いな……」

「凄いでしょ。でも2着だから失敗だよー」

「えーそうなの？」

眼を丸くして、由佳が自分を見つめている。

「まあね」

「そんなこと」

走っていた時の近藤の顔は、いつも自分に優しくしてくれる近藤とは、まるで別人のようだった。

トラックを走っている時、2周目を過ぎた辺りのあの表情……。ただ前を見て挑んで行く力強い眼。きゅっと閉じた唇。それに、ゴール前で他の選手を追い込んで行く時の近藤は、全身をバネのように変え、獲物に襲い掛かる何かの野獣みたいに見えた。

いつもの近藤とは全く違う人が走っている事に、気が付いた時の衝撃。

今、自分に飄々と笑いかける近藤の表情との落差に、由佳の心は震える。

「午後は見てて。挽回するから」

「でも距離長いよ……」

「大丈夫。良かったら一緒に帰ろう」

「うん、待ってる」

「駅のそばにコンビニあるじゃん。あそこにて」
「うん」

真夏の太陽を背に、由佳が笑って返事をした。

「じゃ、俺、練習に戻るわ」

「うん」

由佳の隣り、横山がサングラスを外した。今日も高校一年生とは思えない服装だった。

レング色の腰を絞った形のワンピース。背中が大きく開き、しかも後ろスリットも深い。口紅も塗っている。

深い赤い色が、白い肌に良く似合う。髪を直した時、シルバーの丸い大きなイヤリングが揺れた。

「バレちゃうかと思った」

「ふふっ」

由佳も笑ってしまう。

「まみちゃん、今日はどうして来たんだっけ？」
「さあね」

昼休憩を挟んで、1500メートル走が始まる。

12人で並ぶ。近藤は内側から5番目のトラックになった。横一列に並んだ猛者達をパツと見渡すと、去年の総合優勝校の生徒がいる。

あいつに付いて行けばいいのか。前を見ると、熱気で地面が揺らめいて見える。

負けたくない。誰に？誰にでも。自分にも。ここに並んでいる選手達全員に勝ちたい。意識だけは高く持つ。スパイクを履いた足首を、かすかに意識する。

パン、とピストルの音がする。

走りながら脇を見る。指示を出してくれているのは部長だ。

「LAST」と大きく字が書かれているスケッチブックを持っていた。

そうか。ラスト一周と300メートル。

この辺りで日頃から練習で誤努力をしている者が振り落とされる。もしくは1500に慣れていない者。

最初の300では、最後尾から近藤は走っていた。勿論、見据えているのは優勝校候補の生徒。ペースメーカーにすればいい。ラスト一周で、どこまで近づけるか。練習の度に思い浮かべていた彼等のゼッケンに迫る。なにも考えない。

ただ脚を蹴る力が欲しい。腕を振り切れる力が欲しい。後ろから来るランナーたちの、激しい呼吸の音が聴こえる。前にいるランナーの背中揺らぎが見える。全力でスパートを賭ける。

ゴール前。

歓声が聞こえる。あと50センチの背中。負けたくない。渾身の力を振り絞る。

ゴールを過ぎてから近藤が現実に戻る。応援席にいた部員が一気に寄ってきた。

「近藤おめでとう!」

石井顧問の顔が珍しく緩んでいる。飛び跳ねた近藤は石井の腹にパンチを入れに行く。

「俺が言つてた通りやんか」

顧問に膝を蹴られた。痛いけど、痛くないことにしておこう。

初めて1500で1着になった。

中学の頃から、何回も出場していたが、どうしても1着を取れなかった競走が1500だった。

しかも今日は優勝校候補もいる組で、初めて。学校全体の順位なんかどうでもいい、どっちみち個人が頑張れば学校の順位も上がるのだ。

陸上を始めた中学の頃は、近藤の呼び名は「2着の帝王」だった。悔しくて悔しくてたまらなかった時だって沢山あった。さっきの800も2着だったし。

でもとにかく、そこから脱出することは出来たと思いたい。物凄く嬉しい。

落ち着いてから念の為、部長にタイムを確認する。3分39秒代だった。今度の大会でも、これ位の成績がたたき出せたらいいなと、近藤は呟く。

自分のペースメーカーにしていた彼とは、コンマ0・05秒ほどしか変わらない。心の中で近藤は彼に感謝する。

同時に、由佳のことを思い出す。

（見ててくれたかな……）

そう思いながら近藤は、さっき由佳がいた辺りに向かって歩き出す。

水色のシャツを着た女の子が、自分に向かって手を振っていた。由佳だ。

「村田さん、見てくれた？」

「うん、見た！」

陽の光を背にして頬を赤くした由佳が、フェンス越しに腰を屈めて近藤と視線を近くする。

「応援ありがとうね」

「ううん」

「もうちょっと待っててくれる？」
「うん！」

近藤が初めて見た、屈託のない由佳の笑顔だった。
夏の陽射しの中、こんなに体も心も昂ぶっているのに、何故か胸をぎゅっ……と。

なにかに強く掴まれたような感情に襲われる。

「俺、戻るね」
「うん」

くるつと振り返る。部員が固まって他の選手を応援している場所へと、近藤は歩き出す。

スパイクを履き替えてもいなかった。

自分の競技が終わると、途端に脚が重たく感じる。

あと一時間もすれば、閉会になるだろう。

（村田さん。俺、早く一緒に歩きたい……）

・・・

待ち合わせたコンビニに、近藤が到着したのは結局、午後4時過ぎ。

店内からサングラスの女の子が、入れ違いで出て行く。由佳の姿を探した。

奥のレジの斜向かい、ケーキやドーナツが並んでいる棚を、真剣な眼で眺めている。

「太るよ？」

そう横から声を掛けたら、噴き出した。

「ひどい」

「ごめんごめん。帰ろっか」
「うん」

「もう夕方になっちゃったね」

電車の中で、由佳がぼつんと言った。

「ごめん、こんなに時間が掛かるとは思ってなくて」

半分、予測はしていたが、もっと早く段取りされているかと思っ
ていた。

「ううん、いいの」

「うん」

「あのね」

「ん？」

「渡したいのが有ったから……」

左肩に掛けた大きな布製カバンを持った由佳が、恥ずかしそうに
答えた。

「何？」

「うん……、ちょっと。電車の中じゃ」

「次で降りよう。少し遅くなるけど、いいかな」

由佳は頷く。確か、次の駅は改札を出て大きな通りに出たら、フ
アミレスがあつたはず。

電車の扉が開く。ホームに出た二人は、お互いの手をつなぎたい
とも言い出せない。

改札を出て、大通りに向かう。

ふたりでファミレスに入った。暦の上は休日であるし、夏休みで
もあるせいか店内は混雑している。

それでも禁煙席に、すぐに通された。

「お腹すかない？」

近藤が対面にいる由佳に尋ねた。

「そ、その前にね」

「？」

「あのね」

由佳が、かばんを開き、中から水色のリボンが掛けられた30センチ四方程度の、淡い黄色の紙包みを取り出す。

「これ、使つて下さい。た、誕生日のプレゼントです」

もじもじしながら両手で差し出してくれた。

「嬉しい。ありがとう！」

近藤も、そう言いながら両手で受け取った。いいえ、と小さく由佳が言いながら、自分の事を見つめている。

「まみちゃんと選んだの。さっき、お昼休みに」

「横山と？」

「そう」

「一時間位しかなかったよ？」

「うん」

……横山と？現地で待ち合わせでもしていたのかな？

「開けてみてもいい？」

「うん」

えへへ、と言いながら丁寧にリボンを外し、包装紙のセロテープを外していく。

「近藤くんって、器用だね」

「うん、俺の唯一の長所」

ふつ、と由佳が噴き出す。包装紙を全て開くと、白い封筒がカサ

……、と音を立ててテーブルの上に滑り落ちた。

「て、手紙は後で」

「わかった」

大きめの透明の封筒に、くるくる丸められたスポーツタオルが2枚入っていた。

このブランドのものは好きで、近藤はよく着ている。真紅のタオルと、深い黒色のタオル。

「わあ……」

思わず溜息が漏れた。

「広げてみてもいいかな」

「うん」

真紅のパイル地のそれを取り出してみた。白いＴシャツを近藤くんは、よく着てるから……、と由佳の声がする。

すっかりした厚みがあり、そして暖かい。

近藤は何故だか自分でも分からないけど、涙目になって再び由佳に礼を言った。

「ありがとう村田さん」

「そんな……、タ、タオル２枚くらいで……」

「でもさ、俺の為にさ……」

「や、安かったんだよ。そんな」

この人が親から貰う小遣いなんて、その辺の女子高生と比べたら、全然デフレ価格に決まってる。

着てる物を見たら、何となく分かる……。それに口で言う程、タオルは低価格の代物でもない。

ちゃんと知ってるんだぞ俺は……。

「大事にする」

「うん」

「俺、いま、めちゃくちゃ嬉しいよ」

「わ、私も、近藤くんのそんな顔が見れたら嬉しい」

「なんか頼もつか？」

「ドリンクがいいな」

「じゃ、俺が頼んで置くから村田さんにドリンク頼んでもいい？」

「何を持って来たらいいの」

首を傾げて近藤の言葉を待っている。

「アイスコーヒー。ガムシロ、ミルク」

「うん」

由佳が席を立った。近藤がオーダーする。

由佳の席からは見えないうちに、レシートを自分の方に寄せて置んだ。そして手紙が入っているらしい封筒をスポーツバッグの中に入れる。

由佳の唇を見る。水を飲む口元。ストローを咥える口元……。

触りたいな……。

柔らかいんだろうな……。

近藤 12

大会の翌日。

今日の練習は軽めにこなす。明日は休むと顧問には伝えてある。

走っている途中、近藤は武田の顔を盗み見る。ちら、と、こつちを見たような気がした。

素知らぬ振りをして、ダッシュの練習を続ける。

校舎の周りを、校庭も含めて5キロ走る。

普通に整地されている訳ではないから、アップダウンもかなりあるし戸建住宅もある。

入部当初は部活での、この時間が、一番キツかった。

この坂を登りきったら自分はずっとタフになれる。歯を食いしばって走り抜ける、夏の道は熱い。

自分を追い抜いて行く誰かがいる。柳楽だった。追い抜かれるその時、自分に話しかけてきた。

「なあ」

「あ？」

足腰の強さは、多分、男子陸上部員の中では一番なのではないか。振り向きながら走っても一向にペースを落とさずに、柳楽は自分に話しかけてくる。

「聞いたか？」

「何を」

「武田だよ武田。あいつ神社で女をよ」

「へえ」

しらばっくれた。こういう事には、首を突っ込まないに限る。

「部員全員、知ってるんだ。おまえんちの近所だろ。」

「何が」

「ああもういいや。聖人君子様には、つまんねえ話題で悪かったよ」

柳楽が、忌々しそうな表情を露骨に見せて、ダッシュして行った。
「聖人君子様」？バカヤロウ。何にも知らない癖しやがって。

それにしても、人の口に戸は立てられないとは、よく言ったものだ。

16歳のオスなんだから、興味がない訳がない。
ただ何となく、心の底で武田を軽蔑してる自分がいる。
外ってなんだよ外って……。

着替えている時に、部長に話しかけられた。

「近藤、着替えたら職員室に」

「は？はい」

「俺も行くから」

不思議に思ったが、個別に部員に対してのアドバイスなら、うちの顧問は頻繁にある。

この時期になんだろう……。もしかして9月の県大会の事？

それなら、自分よりもタイムが早い部員と言えば。柳楽、武田。
自分が認めてる同級生は二人いる。

「失礼します」

職員室に入ると、角刈りで大柄な顧問の石井が「おう」と近藤を手招いた。

右手には30センチの物差しを持っている。部活の時間を外れると、男子体育の授業を持っていた。

それに生活指導だった。授業でも部活でも、陸上部員なら誰でもビシビシ鍛えられる。

ただ、それなりに結果は出していて指導を素直に吸収して、あらゆる大会で上位に入った先輩が沢山いた。

体育関係の大学に入り、体育の教師になった人もいるそうだ。

石井に指導を受けたくて入学してくる生徒も、通年に渡って少なくはない。

部長の鳥飼がそうだったし、近藤自身もそうだった。柳楽も確か、そうだったはずだ。

中学の時から、この鬼顧問に指導されたくて勉強して、入学してきたのだ。

県内の中学陸上部員は、女子も男子も「神様のいる高校に行きたい」と言って受験する。

近藤は何よりも陸上が好きだったから、厳しい指導は何とも思っていないかった。

石井の机の上には「運動生理学」や「高校生の指導について」とか、分厚い本がカラフルに並んでいる。

「まあ、そこに座れや」

「石井先生なんつすか」

「なんつすか、とは何やねんな」

石井は豪快に笑いながら、近藤の腰を物差しで小突いた。痛つてえなあー、パワハラだー。

二人の遣り取りを聞きながら、石井の向かい側にいる、美術の山田教諭が笑っている。

そうこうしているうちに、部長がやって来た。

「二人揃ったな。近藤、おまえ9月に5000走らへんか」

「県大会？」

5000……と改めて聞いて、体が硬くなってきた。出来るかな、俺に……。

「そつや」

「俺よりも速い人がいるでしょう」

「誰や」

石井の眼光がやや鋭くなった。言うてみい。石井が言った。

奈良ですつと教鞭を取って来たと聞いている。奈良県は男子も女子も陸上が強い。そこで強い選手を育て上げてきた。

それが何故、関東に移ってきたのか近藤は知らない。

「近藤よう」

「はい」

「誰がおんねん」

県大会の5000メートルに出場できる選手は各校につき3人だ。そこで3位以内に入ったら、11月のブロック大会の出場権が手に入る。

部長が口を開いた。

「柳楽はトライアスロンに出す。」

それ以外の種目では、1年生全体を近藤が引っ張って行って欲しい」

「え」

近藤は耳を疑った。男子陸上部員で1年生は12人いる。

「な、柳楽とか他にも」

「柳楽は別格や。でも人をまとめて引っ張り上げる力はない」

石井の言葉に、近藤は頷くしかなかった。

「おまえと、あと2人、5000を走れる人間を選ぶから一緒に練習せえ」

「3000から5000専門ですか」

「ああ」

「えつと……」

どう返事をするべきか。

「その鳥飼な。中学時代、そんなに記録が出る子じゃなかったんだよ？」

「え」

部長を見ると、苦笑いをしている。

「授業の成績だって、そんなに良く出来るヤツちゃうかってん」

「やめて下さいよ、先生」

部長が焦っている。

「やめへんわ。おまえが良いサンプルじゃ」

にやにやしながら部長を制して、近藤の方に向き直った。

「俺の言う通りにしとったら、必ず結果は叩き出せる。5000。やれや」

「まさか、他にも」

石井は、にやにやしながら言った。

「当たり前やないか。種目はな、沢山あんなんで」

「でも武田だって……」

石井は大きな吐息をついた。

「あいつ、さつき、退部届を持ってきてんやんか」

「退部？」

「この頃、全然アカンかったからな」

部長が近藤に目配せしてきた。石井はその事については、話したくないらしい。

「わかりました。5000やります」

帰る時、校門迄、部長と並んで歩いていった。

「高校入学するまで“たいしたことない選手”だったって言うのは、本当なんだ」

部長の言葉に、近藤は頷いた。

「石井先生は本当に凄いと思う。言う通りにすればいい。あの先生は、大人としても尊敬するわ」

「そうなんですか」

「今日な、武田は最初、俺に退部届を渡して来たんだよ」

「それ違うでしょう」

「そう言った、あいつには。顔を合わせたくなかったんだろうな、石井先生と」

「何かあったんですか」

「妊娠させちゃったんだよ、他校の生徒を」

「え……」

頭がグラグラしてきた。神社で見た女の子？

「親が怒って、こっちに電話掛けて来たんだってさ」

「いつの話ですか」

「先々週」

「うちの学校の生徒じゃないんですか」

「違う」

ますますグラグラして来る。あの女の子なら、中絶させて速攻あれか。

「中絶させたんだったさ。滅茶苦茶、石井先生が怒鳴られたっぽい」

「武田の親じゃなくて？」

「あいつ、親いないじゃん」

「え」

「いない、って言うかさ。遺棄されてんだよ。今、じいちゃんばあちゃんところに住んでる」

「へえ……」

「年寄りじゃ話にならない、って今度は生活指導だよ。担任だしさ」

「とばっちり、ですね」

「ホント、こっちも迷惑するよ。近藤。この話、誰にもすんなよ」

「わかってますよ」

部長と校門で別れる。

近藤は、由佳の顔が無性に見たくなる。

「村田さん……」

昨夜、家に帰ってから鞆から取り出した真つ白な封筒。

糊付けされていないそのの、中身を取り出す。ポストカードが一枚出て来た。

青空に大輪のヒマワリが、すつと一輪。背筋を伸ばして立っている写真だった。裏を返す。

丁寧なボールペンの字で、こう書かれていた。

「近藤くん、お誕生日おめでとう」

あの時の自分自身に流れた空気と、今さっき聞いたばかりの澱んだ話。落差が有り過ぎる。

そして自分には、澱んで後ろ暗い空気は似合わない。

.....

薄曇の、近藤くんの誕生日の翌々日。

前から楽しみにしていた日……。近藤くんは2分遅れでやって来た。

「ごめんね、待った？」

「ううん」

毎日のように一緒にいるのに、いざ、近藤くんが私服姿で私の隣にいると

すごく緊張してくるのが、自分で分かる。いまだに慣れない。

向こうにも伝わっているのかもしれない。そういう時は、近藤く

んは何も言わない。

ただ黙って、少しずつ時間が過ぎるのを待っている。
そんな風に思えるんだけど……。違うのかな……。

この頃、緊張がほぐれる頃合みたいなのが、私、自分で分かる
ようになって来たみたい。

ホームで電車が来る時間を、腕時計を見ながら待っていた。

近藤くんが、不意に私を見る。

「あのさ」

「なに」

横を向いて少し見上げると優しい眼が私を見ている。ときどきしてきた。

「あのカード、すごく綺麗な写真だね。ありがとう」

「いいえ」

いつからだろう。近藤くんの口癖が移っていた。

何かお礼を言われたら「いいえ」って言う。

それだけなんだけど、言われた人はびっくりするみたい。そうだよね……。私もそうだったもん。

でも言われた直後、その人の頬が緩んだり、にこにこしてくれると嬉しくなる。

その繰り返しで、近藤くん弟妹は出来ている。いい御両親なんだよね……。きつと。

私も時間をかけたら、近藤くんみたいに、朗らかな笑顔が似合う人になれるんだろうか？

なりたいな……。

電車が来た。

私達は並んで座る。

「あ、あの」

「なに？」

「あのカードね。同じの私も買ったの」
「？」

「近藤くんみたいだなんて、思ったから」

言いながら、泣きなくなつた。

こんな人が沢山いる前で、まして近藤くんの前で。もう心配掛けたくないのに……。

自分で自分の鼻の頭を指でつつく。

昨日、父が帰宅してから寝る迄の間を思い出す。まるで地獄にいるかと思つた。

……食事を取りながら、たまたま流れていたテレビのニュースに私の手が止まる。

「同居の25歳の男が真由美ちゃんの頭部を殴打にて、意識が……」
「痣が多く……」

「今朝死亡が確認された……」

姿勢を正し、吸い腕に唇を付けた。無責任な近所の女性らしき声が、テレビから聴こえてくる。

「まだ5歳なのに」「全然、そんな風には見えなかったのに」
「可哀想」

ニュースが次の話題に移つた。

顔がこわばつたまま平気を装い、食事を続ける私を知つてか知らずか

真正面から母の声がする。

「血の繋がった親なら、子供を殺しても罪は軽いんだよね」
「ふうん」

「でも子供が親を殺すとき、重罪になっちゃうんだよ」

何百回何千回と聞いた言葉を、誇らしげに繰り返す母は、まるで呪文をかけているようだ。

私はそんな事しない。

ひたすら心の中で、本当に言いたい言葉を押し込め、静かに殺して行く。

「おかあさん」

「なに」

「明日、まみちゃんと出掛けるから」

「そう。帰りは遅くなるの？」

「わかんない。でもいつもと同じ位だと思う」

母は無言だった。そのまま逃げるように、自室の中古のパソコンを開いた。

少ない小遣いを貯めに貯めて、先月ようやく手に入れたものだった。

時々、両親が履歴を盗み見ているのを、私は知っている。

そのパソコンに、まみちゃんからのメールが一通入っていた。

まみちゃんには、自分の家庭環境を打ち明けていた。

親の就いている職業は違っても、幼い頃から寂しい思いをしてきたようで、通じるものがあった。

ただ、勿論、向こうの両親の方が愛情深い人達なのだろうけれども。

まみちゃんのお父さんは県会議員をしている。家には居ない事が多いらしい。

いかにも男親らしく、一人娘には甘いらしいし、躰は母に任せて放置している状態のよう。

まして、あんなに可愛くて賢い娘に何か頼まれると、何でもイヤとは言えないだろうな。

以前、話題の流れで「近藤くんの家で毎日自習してる」と、メールに書いた事がある。

「親に何か言われたい？」

「言いたいみたい（笑）」

「任せて」

「え？」

「いいからいいから^^」

次の日の夜、横山議員が家に直接電話を掛けて来た。その電話に出たのは私だった。

「あ、あなたが娘と同級生の村田さん？」

よく通るハキハキした明るい声の男性だった。受話器を取って名乗った直後にそう言われた。

「あ、はい」

「まみがいつも御世話になってます、ありがとうございます」

「えっ。いいえ、は、はい。あ、こ、こちらこそです」

受話器の向こう側で、わっはっはっ、と豪快な笑い声が聞こえた。いやあ、いいお嬢さんだ。

「お父さんか、お母さん。いらっしやる？」

「母がおりますけれども……」

「代わって頂きたいのだけれども、いいですか？」

「はい、ちょっと待ってて下さいね」

初めてまみちゃんのお父さんと話した。聞き耳を立てていた母に電話を代わる。

訝しそうな顔の母が受話器を取ってから、急に表情を変えてペコペコし始めた。

電話の内容は分からない。

でも、時々、快活な横山議員の笑い声が漏れて聞こえて来たのは覚えている。

それから、帰りが遅い事についての、両親の詮索めいた言葉は無くなった。

メールに眼を通す。眼を通してすぐ、消去してしまう事にしてい

る。誰かに見られたくない。

内容は、両親が表面上はにこやかにしていても、家の中が冷え切っている事だった。

もう何年も、そういう状態が続いている事。

そのきっかけは、まみちちゃんのお母さんの浮気だと、前に知った。自分の存在があるから、両親が離婚できないのかもしれないと悩んでいる。

彼女は、父の事を尊敬しているように思える。

学校で交わす雑談でも、お母さんの話題は出て来ない。

「うちも一緒だよ……」

そこまで文字キーを打って、その先の文面を考えていた時だ。

いつの間にか帰宅していた、父と母の激しい口論が聞こえて来た。とりあえず行って止めに入った方がいいのだろうか？

何かが割れる音がした。全身が、ガチガチに固くなった。

私の耳に、壁越しに大きな足音が飛び込んでくる。

母が叫びながら私の部屋のドアを叩いていた。

「開けて！開けて！！」

そこには母の背中や頭、頬を力任せに殴る父と、必死に逃れようとしていた母が居た。

「お母さん！」

両親が転がりながら自分の部屋に入って来る。

背中に馬乗りになった父が、母の髪の毛を引っ張りながら何度も殴りつけ、叫んでいる。

泣き叫ぶ悲鳴が、部屋中に響き渡る。

「やめて！」

叫んだ私の足元が震えていたが、母の悲鳴は止む事はなかった。両親が私の逃げ場を塞ぐ。

それでも迷わずに飛び出そうとして、よろけた私の足が、父の脇腹に当たった。

父は、この前「この野郎！」と怒鳴り、私の頬を平手で打った。

次に、両腕を凄い力で掴み、廊下へと思いつ切り投げられた。

尻餅を付いて廊下を滑った私の背中に、下駄箱の角が勢いよく、
がん、と当たった。

その時の事を思い出す。

ひやり、と冷たいものが背中を抜ける。が、今回、父は気が付かなかったようだ。

部屋を出る直前に振り向いて、布製かばんを取る。小銭を入れて
いる財布を思い出したから。

そのままサンダルを履き、震える足で外に出た。母が蹴られて泣
き叫んでいる声がする。

ドアの隙間から漏れる悲鳴を耳にした通りかかった住人が、ぎよ
っとして私を見ていた。

顔から火が出る位、恥ずかしかった。

駅の裏側に、小さい公園がある。そこはいつも電灯が煌々と点い
ていた。

私は、敷地内のベンチにへなへなと座り込んでいた。

眩暈がする……。

生まれ変わってみたい。誰も私を知らない所に行きたい。

俯いて顔を両手で覆う自分に、警官が肩を叩いていた。

「きみ？家はどこ？」

気が付かないうちに、私は泣いていた。

「あ、あそこ」

泣いたままで自分の家の方向を指で示す。

「どうしたの」

若い警官が丁寧に見つめて来た言葉の響きは、この世で二番目に優
しかった。

「あ……」

言葉にならず、大声で泣き出した。

「大丈夫です、大丈夫です」と繰り返しながら。

「交番に来るかい？」

「大丈夫です……。すみません」

ぐしぐしと鼻を嚙りながら、歩き出した。

例え職務でも、他人に優しくしてくれる人っているんだな。

……、違う。

……他人だから優しくなれるんだろうか？

自動販売機でミネラルウォーターを買い、少しずつ口に含みながら家に戻った。

家の中に両親の姿は無かった。母は多分、明日の夜には帰っているだろう。

あの人達は互いに、行ける場所が無い。

顔を洗い、真っ赤になった眼の周りを冷やそうと冷蔵庫の扉を開け、氷を幾つか出した。

「近藤さんと折角……。出掛けるのにな……」

ごめんね近藤くん。ごめん……。近藤に詫びながら、タオルに氷を包んで目を冷やす。

少しでも可愛くなりたいのに……。なれなくて。ごめん……。

ぼろぼろ涙が出てくる。もう一回、顔を洗った。

近藤に渡したカードと同じヒマワリの花のカードは、机の上に置かれている。

ベッドに入る直前、目線の中に入ったそれは、単純に、私の心を深く突き刺す。

……私。

近藤くんと一緒にいてもいいのかな。

逢いたいけど。

本当にいいのかな。

いいのかな……。

近藤 12（後書き）

次回から、第二章に入りたいと思います。

「やさしい声、やさしい掌」

とか、どうでしょう？w

近藤 13

電車の中。窓から射す陽の光も、お互いの昨日の記憶も、どっちもリアルな現実。

由佳は繰り返す。

「近藤くんみたいだなんて」

言った直後に、唇をきゅっと閉じる。鼻の頭が少し赤くなった事を、近藤は見逃さない。

「嬉しい、ありがと」

ぎゅうつ……と、何かに胸を掴まれる感覚に襲われながら、近藤が由佳の耳元で尋ねる。

「手、つないでもいい？」

耳に直接、流れて来る低くて甘い声。その響きに、由佳の心は壊れそうになる。

声が優しいのは……。かすかに肩が震えた。

「だめ？」

「うつん……」

由佳の手を、わざと、もう片方の手で取って、由佳に近い方の手でつなぐ。

何の屈託もないように指を絡めながらも、その体の緊張に気が付いている。

「あのさ」

「なに」

「昨日、何食べた？」

「えっ」

意外な言葉に由佳の体から力が抜ける。近藤は、由佳の手を握りしめる。

「俺、全然覚えてないの。今日がさ、ちゃんとしたデートじゃん？」

「わ、私も」

改めて由佳の顔を覗いたら、どことなく瞼が腫れているような気がした。

近藤は思う。……女が多い家族を作ってくれた親父に、感謝します、と。

16歳のこの人の「ある部分」は、まるで生まれたての赤ん坊のようだ。

ものすごくバランスが悪すぎて、4歳児の亜紀子より酷い。

ともかく、妹ふたりの子守役を仰せ付かった俺様の名前が廃る。待つのもいいかもしれない。

だから大事に。大事に。

正直言つて、生まれて初めてのこんな感情に、戸惑ってばかりだ。

周りの同級生の中には初体験を済ませたのもいるし、武田みたいな極端な話もある。

素直にそういう話には興味もあるし、早く体験してみたい。

由佳を相手にして、どうすればそこまでたどり着けるのか分からない。

ただ、武田が女の子を妊娠中絶させた話を聞いてから、少し自分が変わったような気がする。

今、この人が側に居る。それだけが確かなものだ。

改札を出る。近藤は何も言わずに由佳の手を握る。抗われなかった。

不意に握る手に力を籠める。由佳が一瞬、びくつとする。

「だめ？」

「そ、そんな」

「じゃあ、このままでいい？」

「う、うん……」

水族館の中に入ると、夏休みということもあり、子供連れの客で混雑していた。

最初から、はぐれそうになる。好都合だった。由佳の手を握りしめて館内奥に進む。

回遊魚のパネルの前で、人ごみが途切れた。

由佳が興味深そうに、説明文や写真を交互に眺めて少しずつ進んでいる。

館内の照明は、足元が少し暗い。段差になっている所にはフットライトはある。

が、手をつないでいたら、却って転びやすくなるかもしれない。

近藤が声を掛けた。

「村田さん。足元」

頷いた由佳を斜め後ろ、ぐっと引き寄せる。頭が肩に付いた一瞬、髪の毛のいい匂いがした。

「あっ」

「気が付いてなかったでしょ、段差」

そのまま横に移動していたら、つまずいてふたりとも転ぶところだった。

「あ、ありがとう……」

うん、と頷いた近藤は館内を見渡した。

「こういうところ、好きなんだね」

立ち止まったまま、由佳に問いかける。

「んー。自由、って感じがするからかなあ」

「そっか」

「プラネタリウムとかね、そういうのも良かったんだけど」

「うん」

「私、多分、こないだみたいに寝ちゃったような気がして」

照れ臭そうに言う由佳が、二日前の宿題を忘れた言い訳を教師にする子供みたいに見える。

その一生懸命な笑い顔を見ていたら、眩暈がしそうになった。

なんで由佳の臉が腫れているのに気が付いてから、こんなに切なくなるんだ。訳わからん。

「あれは確かに眠たくなる」

「でしょう？」

「中学の時にさ、弟が“にいちゃん、プラネタリウム行きたい”って言ったの。夏休み。

だから連れてった。部活休みだったし。そしたらさ、ぐうぐう寝息を立てて寝やがって」

「あの弟さんが？」

「そう。託児所の先生に自慢出来るネタが欲しかったんだろうけど」「そうなんだ」

「……俺さ、村田さんが」

そこまで言いかけた時、年配の女性が、さっきの段差によるけて近藤にぶつかって来た。

「わ……っ」

近藤も転びそうになった。近藤の存在がなければ、その人はひっくり返っていただろう。

「大丈夫？」

由佳が近藤に問いかけた。女性と、友人らしいもう一人の女性が、近藤に一生懸命謝っている。

おばさんは、ふたりとも重たそうなバッグを肩に掛けていた。

「あ、大丈夫、大丈夫ですから……！」

近藤は、そそくさと由佳の手を引っ張るように、渡り廊下に出た。「村田さんに「足元、気を付けて」って言うてる場合じゃなかった。危険はどこにでも潜んでいる、って分かったあ。参った……」

「ホントだね」

ふたりで顔を見合わせて笑った。

「何か食べようよ。もう1時だし」

「うん」

陽射しが射込んで来たテラスで、向かい合わせになっている。ふたりで、オムライスとアイスコーヒーを頼んだ。

由佳の白い綿のブラウスが眩しい。耳元に、飾りの付いたピンが見える。

それで両サイドの髪の毛を留めていた。

「あのさ村田さん」

「ん？」

「何か、欲しいものない？」

「え」

「俺ばっかプレゼント貰ってるの申し訳ないよ。誕生日、ちょっとしか変わらないのに」

「そんなこと……」

「いいじゃん別に」

近藤の言葉は、どこまでも屈託なく由佳の耳に届く。

「あ、あの。私」

「なに？」

「そ、その前に聞いてみたい事がある」

「なに？」

由佳が息を吸った。

「こ、近藤くんは、私と居て、つ、つまんなくならないの？」

近藤が眼を丸くした。

「ならない。思った事ない」

なんで？両親から散々言われてきたのに。どうして？なんでそんなに、すっぱり言えるの？

自分を凝視する由佳の対面にいても、近藤は少しも動じない。

「家の中さ、俺んちめっちゃウルサイのよ。だから村田さんと居ると落ち着く」

「そ、そうなの？」

由佳が予想もしてない答えだった。そして、それは近藤には、決して嘘じゃない答え方だった。

「女が3人もいるんだよ？ピーチクパーチク。酷い時は一日中、耳栓が必要な位」

高校受験の時に、母と妹がいる間に問題集を放り投げた事もあるんだよ、と言った。

「ぶつけたの？」

今度は由佳が眼を丸くした。

「ぶつけない。それはしないけど、俺の部屋の前だよ？そこでさ。洗濯物とか持ったままで」

「本当？それ」

「疑ってるだろ」

「うん」

「じゃあ今度、家に来た時にその問題集を見せてやる。後ろのページが外れた所を」

由佳が笑い出した。信じられない、近藤くんがそんな事するなんて、と。

「ちゃんと見るよ？俺は嘘はついてないから」

「私、気にしすぎなのかな」

「だと思っ。村田さんの方こそ、俺といてどうなのさ」

言っんじゃなかった。一瞬、近藤は思った。由佳がサッと真顔に戻ってしまったから。

由佳は少し目線を横に外す。

近藤くんと一緒に居たら、悩んでいた日々に、パツと陽が差して消えていくみたいだ。

大げさな否定もされないし、ましてや無理に添わせられる訳でもない。

それに たぶん……。近藤くんは思っている事があつたら、私に伝えてくれる。ぜんぶ。

少しずつ腫れが治まった眼で、近藤を観て告げる。

「楽しいよ。でも、ずっと気になってたから」

「楽になればいいんだよ」

「ら、楽に？」

「そう。わがままになればいい。どうせ俺の前じゃん、他に誰もいない」

「他に」

「こないだ、シャープン持ったまま寝てたろ？あれ結構、嬉しかったんだ」

「え？」

「俺は」

自分が言っている言葉の意味に気付いた近藤も、ときどきしてきた。

「すごく寛げたんだ、あの時」

「……うん。一緒にいたら楽しい。だから別に何も要らない」

真面目な顔のまま言われた。由佳にしてみれば、本心からの言葉だった。

「それはだめ、それとこれとは話が違う」

「だって要らないもん」

いつのまにか、注文していた物が来ていた。

「じゃあ今日中に考える」

「？」

「受け取ってくれる？」

「う、うん」

後はふたり、別段、会話も交わしていない。

ほとんど黙ったまま、手をつないで進路の矢印の方向に行儀良く歩いて行った。

時々、他の人にぶつかったりしないように声を掛け合いながら。水族館の出口手前、ぬいぐるみや記念品を売っているコーナーが

ある。

近藤は「これは亜紀子に」と言いながら、ペンギンの小さなぬいぐるみを籠の中に入れた。

そして、ラッコのぬいぐるみを指差した。隣にはイルカが置いてあった。あれは止めとくか。

「村田さん。あれ、可愛くない？」

「あ、ほんと」

「じゃあ決まり」

「え」

同じ形の、チェーンが付いている、大きめなストラップにもなりそうなものを二つ入れる。

「うっしっしっ。ふたりで鞆に付けようぜ」

部長が、臨時女教師と、このマスコットを鞆に付けている事に、近藤だけが気が付いていた。

「そうだよ、俺が尊敬する鳥飼部長みたいに。やーらしーなーもうー」

あの堅物の部長がねえ。あんな御色気ぶんぶんの……。いや。由佳に言うのは止めとこう。

「こ、近藤くん？」

「いいのいいの。やってみたかったんだよね、俺」

にやにやしながらレジに向かった。脇に菓子類やCDが並んでいる。

波の音、というタイトルのCDがあった。それも手に取って、眺めてから籠に入れた。

由佳を見ると、クリアファイルやらハンカチタオルを籠に入れている。

会計が終わって、ふたりで一旦、館内を出た。

歩きながら近藤が、由佳にラッコとCDを、ぽん、と渡した。

「俺からの「お誕生日おめでとう」だよ」

「……ふ、二つもいいよ」

「いいよ。そのつもりだったんだ」

「あ、ありがとう……」

「いいえ。それよりも、リボンとか掛けてなくってごめんね」

「いいの……」

無造作に手渡された小さな袋を、両方の掌に乗せた由佳は小さな子供が、親から何か欲しかった物を、貰ったばかりの表情をしてる……。

夏の夕焼け空が由佳の頬を照らしている。近藤は眼を細めて、これらの景色の全てを見ていた。

・
・
・

いつものように、向かい合わせで勉強している。

部屋の隅に置いている由佳のカバンを見る。

貝殻を両手で抱いた灰色のラッコが、空調の風で揺れていた。

近藤が、何の気なしに背伸びをする。そのまま、由佳に言う。

「村田さん」

「はい？」

由佳が顔を上げた。

「明日から合宿なんだ」

「そうなの？」

「うん」

「じゃ、今日は早く帰ろうか？」

「だめ。いつもと同じがいい」

由佳が赤くなって下を向く。

「さみしいな」

小さな声が聞こえた。

「3泊したら帰ってくるよ。えっと。7日だったかな」

近藤がいつもの通りで居られたのは、ここまでだった。

「そう」

由佳の心底、寂しそうな顔を見た。それを見た瞬間に、近藤の胸に強烈な痛みが走る。

近藤自身には自分の鼓動が、絶え間なくはつきり聞こえていた。

「隣りに座ってもいいかな……」

「うん」

自分の鼓動を聞きながら座った。黙って由佳の手を握り、指を絡ませる。

由佳は自分の指先が、かすかに震えたのを誤魔化す為、緩い力で握り返す。

「村田さん……」

近藤の声がかすれている。

由佳はおどおどしながら、俯いた顔を横に上げた。

「あ、あの」

近藤が何か言いたそうに唇を動かした。言葉がふたりとも出て来ない。

どんな顔をしていいかも分からない。

お互い、心臓が口から飛び出そう。じっとお互いの眼を見ているだけしか出来ない。

かすれた声で近藤が続けた。

「く、くちび」

「う」とも「きゅ」とも付かない音が、由佳の唇から漏れた。近藤の眼を見つめたままだ。

「あ……、さ、触ってもいい？」

また「きゅ……」みたいな音が由佳の唇から漏れる。

空いている方の手の中指と人差し指を、恐る恐る、近付けて行く。由佳は半開きの唇のままで、眼を閉じた。近藤の指が、ゆっくりとそれに触れる。

はあ……、と溜息をついたのはどちらだったのだろう。

柔らかくて温かい感触を確かめながら、由佳の唇の上に、指をすすかに滑らせる。

眼を閉じた由佳が、片手で近藤の腕にしがみつこうとする。が、迷うように宙に浮いていた。

たったこれだけの事なのに、ふたりともその先、どうしていいのかわからない。

近藤が由佳の彷徨う腕を見つけた。指を絡ませていた手をほどき、自分の腕へと導く。

由佳の心臓が痛くなる。導かれた掌が、震えながら近藤の二の腕を掴む。

筋肉が綺麗に付いた腕は骨っぽくて熱い。由佳が瞼を開けた。

こないだの若い警官のように、優しく、いたわるような眼がそこには有った。

どうしよう、胸が痛い。自分の嫌な記憶の全てがフラッシュユバツクしてくる。

「あ、あの」

小さな掠れ声。由佳が近藤に言う。

「……なに」

指を唇から離して、近藤が答えた。

「わ、私」

「ん？」

「や、やっぱり」由佳を途中で制して近藤が言う。

「言いたいことあるなら言ったらいい」

「……私には、近藤くんは」

「？」

「ち、違う世界の人に見える」

「……なんで？」

「問いかけながら、由佳と指を絡めた。」

「明るいし」

「……そう？」

「……それに、“赤の他人”だから……。優しいの。きっとそうなの」

由佳が続けた。

「“他人”」

「違うよ」

近藤の我慢が崩壊する。横から由佳の体を抱きしめた。

「こっ……」

由佳が抵抗したそうに動く。今だけ我慢しろ。ぎゅっと力を籠めて、肩や背中を抱きしめる。

「あのさ。……こないだ村田さんが何を言いたいか、ちゃんと分かってた。俺」

自分の肩の辺りに由佳の額を押し付ける。掌で髪の毛を撫でた。触れる肩から背中への、頼りない温もりが愛おしい。

「村田さんは、強い人だと思うよ」

「……ううん」

「強いんだ」

「違う」

鎖骨の辺りで、くぐもった声がする。

「家で何があっても、普通の顔をして学校に来てる。俺んちにも来る。壊れてるはずなのに、それが当たり前だと思ってる。そうだから壊れてんだよ」

由佳が、しゃくり上げるような声を上げ始めて、ばたばた動く。

我慢しろ。今から語るぞ。

「俺なら無理。ちよつと顧問に叱られたら学校に行きたくなくなる。妹達に「おにいちゃん大っ嫌い」って言われたら、正直3日間は落ち込む。たつたそれだけなのに、二つ重なった時とか最悪。一学期、何回かそれで学校サボつて。アキバをフラフラしてた」

「でもさ。俺には出来ない事を、女の子が頑張ってた。兄弟もいない子が、必死で。俺以上の事があつても。俺は気が付いた時から、学校をサボるのは止めた。何でだか分かる？」

うつつ、と泣く声が漏れてくる。

「尊敬してる子と一緒にいたい。赤の他人なんかじゃない。そんな風に思えない。村田さんの事、一人にしたくない。ぼつちにさせたくない。一緒にいたいんだ。俺が」

腕の力を完全にほどこいて続けた。

「違う世界の人、とか悲しい事、言つなよ」

おろしたてのＴシャツに、由佳の鼻水がべったり付いていた。

「見てよコレ。鼻水。もう……。やだな。俺さ、このＴシャツ、ようやくネットで探し当てて買ったの。それでようやく昨日届いたのに」

涙を拭きながら、由佳が「プツ」と噴き出した。テレビや映画のように恋は上手く行かない。

「合宿に持っていくんだよ？」

朝7時。

近藤は陸上部員全員と、マイクロバスに乗り込んでいた。千葉に向かつて走っている。

陸上部には顧問がふたりいて、もう一人の佐々木教諭が運転手をしている。

千葉の合宿には、佐々木だけが「別荘」と呼んでいる、普通の民家で過ごすらしい。

上級生達は、石井と一緒にあって「今年は何回、後続車からクラクションを鳴らされるか」

女子の先輩達と、げらげら笑いながら数えている。

「おう佐々木ー。そろそろ坊主達をトイレに連れてったれや」

「……あ、あと5分程で！」

佐々木が、一番後ろの席に座っている石井に聞こえるように怒鳴った。

「ほんまか。病院連れてって、って俺は言うてへんからな？トイレやでトイレ」

鳥飼部長の噴き出す声が聴こえた。

「おまえの運転テクで、よう教習所が大型免許皆伝したと思うわ、不況やったんかいな」

バスの中の全員が爆笑し始めた。

「近藤。一年生に配り物あんねん。ちょっと来い」

前方から2番目の通路側に座っていた近藤が、席を立てて動く。

「何ですか」

合宿中の時間割と、練習コースの説明が書いてあるA4の紙だった。

一年生の参加人数は、男子は近藤を含めて11人。女子は10人だった。

「柳楽、寝てんの？」

「ぐうぐう」

近藤の隣の座席が柳楽だ。

「あいつ凄いな。昨日な、部活で5キロ走って、水泳10キロやてへえ」

周りが、口々に柳楽を誉めそやす。俺には出来ない、と。

俺にも無理です。言いかけた時に鳥飼部長のスポーツバッグが目に見えまる。

イルカのキーホルダーが付いていた。鳥飼の席の隣りは空いている。腰掛けた。

「部長」

耳打ちした。

「部長ったら、誰かさんと水族館に行ってるでしょ」

カハツ、声を上げて鳥飼は周りを見渡した。にやにやした顔で近藤が続けた。

「同じもの、見ちゃった。へへ。俺が買ったのは違うけど。プラダ、ですよな？」

いたずら坊主の眼、そのもの。

「近藤おまえ……。言うなよ……。？」

日焼けした顔の鳥飼が真っ赤になっている。日頃シゴキ倒されてる、恨みを晴らすチャンス。

「言いませんよ。あら、顔が赤いつすよ部長。うつひゃっひゃっ」

渋滞していたせいもあり、佐々木教諭の「別荘」というか「実家」に着いたのは午後1時。

佐々木の両親が亡くなった後、以前は佐々木の妹が使っていた。

しかし独身女性が使うには、その家はあまりにも広すぎた。

妹は近所に引越し、その広い家は空になった。

佐々木が年二回、風通しの為に部活の合宿に使わせて貰っている。周辺は、空気もまあまあ綺麗で、公道も広く、合宿場として使い勝手は悪くない。

大柄な石井と対極的に、小柄な国語教師の佐々木は「中学3年間で身長が伸びなかったら」

一時は近くにある競馬学校への入学を、真剣に考えていたらしい。昼食を大量に作って、佐々木の叔母と妹が部員を迎えてくれた。た。

近藤 14

近藤がマイクロバスの中で、柳楽のイビキに呆れたり感心したりしている頃。由佳は、手帳を広げ「近藤くん自習・再開」と、8日のところに書き込んでいた。

「ヒマになっちゃったな……」

写真立ての中の、ヒマワリのポストカードを眺める。

昨日はあれから、奈津子と芳樹が帰宅してくる頃まで、近藤と指をつないだままだった。鼻水がバリバリ着いたTシャツを、洗濯機に放り込んで来た時も。

近藤が、体を離すのを嫌がったから。

「村田さんと逢えなくなっちゃうから」そんな風に言って、ずっと。

……強い人だと思うよ。

低く柔らかい声が、耳の中に残っている。昨日の記憶を、たどり始めていた。

だんだん、自分の体が温かくなるのを感じていく。

「自分の事、そんな風に言われた事ないよ？」

「ふうん。じゃあ俺が一番初めか」

「うん」

「人ってさ、長所って、なかなか分かりにくく出来てるもんなんだぜ」

「プツ。そんな事言う俺、カッコイイって思ってるでしょ？」

「ばれたか」

その後、近藤は真顔になった。

「でも、俺の正直な気持ち。村田さんは強いし、頑張る人だけど」
「だけど……？」

「もつとリラックスしても、いいんだよ」

由佳の表情が曇る。近藤は、指に少しだけ力を掛けてやる。

「リラックスできる場所で、そうしたらいいんだよ」

うん、と頷いた由佳に、近藤が続けた。

「芳樹や奈津子の試合前には、いつも言ってるようにしてるんだ」
「試合前？」

「そう。年齢別に試合とかやるんだよ。半年に一回くらいね」

「そうなの」

「うん。全国レベルまで行かなくてもさ、兄としては少しでも上であつて欲しい」

「そうね」

「始めた頃は、めちゃくちゃ上がり性だったから“ガンバレ”じゃなくて。“ひたすらリラックスしてみる”って言ってやったの。俺」

「それで？」

「そしたら3回目の大舞台で、ふたりとも良い成績が出たんだよね」

「そうなんだ」

「中学の陸上の顧問がそうだった。大会の前に、よく言われたよ」

「近藤さんの周りって、いい人ばかりだね。いいな」

「たまたま、顧問がいい先生だったから。それで陸上が好きになったんだ」

由佳がしみじみ言った。

「すごいな……」

「すごくないよ。村田さんに、ずっと言いたかった。楽になったらいいんだって」

「水族館でも言ってたね」

「そつだよ」

近藤が、由佳の顔を覗き込む。不意の事なので戸惑った。

「誕生日の夜に、親父に言われたの。おまえ、女の子を連れて来るのかって」

「何て言ったの？」

「正直に言ったよ。リビングで勉強してるよって。だってその通りじゃん」

「うん……」

「堂々としていたいんだ。村田さんの事が好きだから」

好き、この言葉を近藤の口から聴いたのは二度目だった。

（好き、か……）

由佳が気付く。時々、ずきずき胸が痛くなる理由に。

私も……。近藤くんみたいに、ストレートで明るい人になりたい。

この部屋は、毎年、夏が来る度に陽射しを眩しく感じる。

その眩しさを、去年までは持て余していた。でも今年は違う。

今頃、近藤くん何してるのかな……。

両手の掌を広げて眺めた。この手をつないでくれる人の事を、身じろぎもせずに思う。

あの時、勇気を奮って、近藤くんに声を掛けてみて良かったな……。

本当は気が付いている。近藤だって普通の“男”だということにリラックスしたり、軽くパニック状態に陥ったり、繰り返す自分に「隙がない」という事が有得ない、そんな事にも。

そついう隙間を見つけた時の近藤の、眉毛がすつ…と上がる癖に

も、気が付いている。

近藤には多分、自覚はないだろう。由佳も、それを本人に告げつつもりはなかった。

でも……。

もしも、万が一にでも近藤が「その先」を求めて来たら……。断る理由もないし、断れるほどの“何か”が起こると思えなかった。そこまで考えて、首を振る。

単純に、自分の唇に指を乗せてみる。

「あ……」

眩暈がした。自分もただの女に過ぎないと、由佳が気が付いた一瞬だった。

その夜、近藤の夢を観た。

乾いた熱さを持った掌が、自分の頬を撫でている。

自分をいたわってくれるように緩い速度で、何度も何度も繰り返している。ただ黙ってそれを受けていた。やがて両方の掌は自分の頭を、すっぽりと包み込む。

近藤の顔を、恥ずかしくて見る事が出来ない。

それでも「いいよ」と言いながら、いつまでもそのままできてくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0260x/>

放課後、彼女にキスしよう～あなたを誰より愛してる！

2011年11月4日02時15分発行